COBALT-SERIES

前田珠子

天を支える者



集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者
天を支える者……7
終末都市の灰色天使……129
木蓮抄……163
幸福の刻印……173
あとがき……197



主要登場人物紹介


スカー
ファティ・
リンシャ

イラスト／明咲トウル

天を支える者

序章

「よく働く愛らしい指だ……」

都風（みやこふう）の――つまり、あまり機能的ではない――上質の衣装（いしょう）に身を包んだ青年が、そっと少女の指に手をのばしてくる。

（二一が二、二二が四、二三が六……）

戸惑いを隠そうともせず、少女はぎこちなく身を引こうとした。

「あの……若様……」

困りきった様子の少女を、しかし青年は解放しようとはしなかった。

不躾（ぶしつけ）この上ないことに、きちんと結い上げられた少女の金の髪にまで指をのばしてくる。

（二四が八、二五ぉ十……）

「惜しいことだね。こんなにも美しい髪なのに……。椿油にマンネンロウを加えた髪油で梳るなら、どれほどまばゆく美しくなるかもしれないというのに……」

綺麗な髪なのに勿体ない――と言いながら、その実このままでは貧相だと言っているも同然の青年の言葉に、少女は気づいているのかいないのか、困惑しきった様子で彼から身を放そうとする。

「若様……」

お願いですから――と、小さな声で懇願するが、青年はそれを聞き届けるつもりはないらしく、身を引く少女を追い詰めるように身を乗り出した。

「そんなに怯えないでおくれ……。一年の大半を、冷たいひとたちしかいない都で過ごす身にあっては、この故郷の穏やかで温かい空気のなかで生きるお前たちの息吹に惹かれずにはいられないのだよ」

他人の視線を意識した、淋しげな笑顔に甘やかなささやき――。

少女はますます困惑したようにうつむいた。

（二六、十二、二七、十四……）

「ああ、目を閉じないでおくれ。その美しい黄玉を、どうか見せて欲しいんだ」

そう言いながら、青年は髪に触れていた手を少女の頬に移動させた。

「あ、あの……っっ」

少女は慌てて身を引こうとしたが、それはかなわなかった。

いつの間にか、壁際まで追い詰められていたのだ。

（二八、十六……、二九、十八……）

「そんな困った顔をしないで……笑っておくれ。そしてどうか、都で凍えそうな哀れなこの男に――」

わざとらしく一旦言葉を切り、青年は少女の顎に手をかけた。

「若様、お願いですから――」

泣きそうな声で懇願する少女に、青年はしかしふわりと微笑みかける。

「少しでも情けがあるのなら、拒まないでおくれ。お前の健やかな姿を見た瞬間、虜となったこの男に、どうか慈悲の心でもって……」

言うなり、青年はくい、と少女の顎を持ち上げた。
「若様！　お願いでございます……お願いですからお止めになって……！」
少女の声は震えていた。
（三一が三、三二が六、三三が九）
「怯えないで……可愛い小鳥のようなお前……。金色の翼で飛び立たれたら、地に縫い止められたわたしは追いかけることさえできないのだから」
青年の顔が、少女のそれに向かって下りてくる。
「若様、わたくしは……」
（三四、十二。三五、十五。三六、十八。三七、二十一）
「もう言わないで……愛しい小鳥。この愛らしい唇が、わたしの望まぬ言葉を紡ぐのを聞くぐらいなら、わたしはすぐにも儚くなることを望むだろうから……ね？」
それはそれは甘やかな微笑を浮かべて青年がささやく。
そうして――。
壁に追い詰められた格好になった少女の唇に、彼のそれが重なる寸前――。

ぷちり、となにかがどこかで切れた。
どすっ、と鈍い音が室内に響き渡ったのは次の刹那のことである。
「なら、とっとと地中に埋まってよ」
つぶやいたのは、青年の鳩尾に、見事こぶしを埋めた少女であった。
「う……」
小さな呻きを洩らしたまま、床に沈んだ青年を見下ろしながら、金髪の少女はふう、と息をついた。
「んとーに、図々しいったら！　なにが冷たい都よ！　なにが慰めておくれ、よ！　都から帰ってきた途端、屋敷中の女の子に、似たりよったりの口説き文句で迫りまくってくれちゃってぇ！　あー、もう気色悪いったら！　あんたみたいな図々しい男、望んだって儚くなんかなりやしないわよ！」
必死に九九を唱えつつ、忍耐の限界に挑戦していた少女は吐き捨てる。
金色の双眸は、怒りにきらきらと輝いていた。
少女の名はナルレイシア。

行儀見習いの名目で、この屋敷に上がっていた少女である。

（あーあ）

足元で悶絶する青年の姿を見つめながら、彼女はこれからのことを思い、ため息をついた。

（まだ半分も読んでないのに……）

堅苦しい貴族の作法に辟易しながら、それでもこの屋敷で大人しくしていたのは、腐ってもなんとやらで、代々の当主が集めたという、貴重にして豊富な書物があったからなのだ。

絶対に汚さない、壊さないことを条件に、書庫への出入りを許された僅かな時間こそが、彼女にとっての至福の時間だった。

（アムルゼン興亡史、読み始めたばっかりなのに……）

だから、限界までは我慢したのだ。

どんなに軽薄でいけ好かない優男だろうと、どんなに鼻持ちならない気障で思い上がった男だろうと、仮にもこの屋敷の跡取り息子なのだ。機嫌を損ねてはまずかろう

……ぐらいのことは考えた。

だから、鳥肌がたつのを我慢して、必死に『遠回しなお断り』を――はっきりいって不得手なのに――やろうとしていたのに。

「大失敗……」

相手がどこまでも、自分の都合のいいようにしか物事を受け取らない性格の主だったことが敗因である。

こちらが引けば引くだけ踏み込んでくる相手に、婉曲な対応が通用するはずもなかったのだ……今にして思えば。

（素直に断っておくべきだったかしらん？　でも、こいつの場合、意地になって口説きにかかって来るような気もしたしなあ。よしんば諦めてくれたとしても、なーんか意趣返しとかしそうだったし……）

たとえば、自分を溺愛する母親に、ナルレイシアに関してないことないこと告げ口したり……実に考えられることだったので、ここは遠回しに行こうと思ったわけなのだが、ことこうなってしまっては、無駄な努力にすぎなかったわけだ。

目頭が熱くなった。

（さようなら……書物に囲まれたバラ色の日々……）

一片の期待すら抱くことなく、ナルレイシアはこの屋敷での暮らしに終止符が打たれたことを確信した。

悲観主義者でない彼女がこう思ったのには、実は理由がある。

生まれて以来、自他とも認めざるを得ないあるジンクスが、彼女にはあったのだ。

一言で言うなら『悪運』というやつだ。

悪事をしようと報いを受けることなく……の方ではなく、まさに運が悪い、の意味においてのことだ。ただし、とことん危ないことにはならないことから、彼女の周囲の人々は、苦笑まじりに彼女のことをこう呼ぶのだ。

不幸中の幸いの権化、と。

たまには例外があってもいいのではないかと思うものだが、過去ジンクスが破られたことはない。

そういう事情もあり、ナルレイシアはこの屋敷での生活が確実に終わることを確信

したというわけだ。

因みに問題の『不幸中の幸い』がなんであるのかと言えば。

……まあ、言うまでもないだろう。

そうして、彼女の諦念による予想通り、事態は転がったわけである。

息子を傷つけられ、しかも彼の言葉しか信じようとしないヤラム男爵夫人は激怒し、元凶であるナルレイシアは即日屋敷を追い出された。

しかも、誘惑したのはナルレイシアの方、との噂の付録までついてのことだ。

もはやこの土地での縁談を望めなくなった彼女は、しかしここで本当に『不幸中の幸いの権化』の真価を発揮した。

すなわち、件の男爵家とは関係のない筋から、このディエーン王国の王都ロスタロイドに住むある婦人の話し相手になってはくれないかという依頼が舞い込んできたのだ。

侮りがたし、『不幸中の幸いの権化』！

「行くわ！　行く！」

ナルレイシアが即答したのには……やはり理由があった。

なんとその屋敷には山ほどの本があり、汚したり壊したりしない限り、好きなだけ書庫の外に持ち出して読んでいい、と言われたのだ。

しかも、相手をする婦人には身寄りがないという。

（つまり、あの馬鹿若みたいな迷惑男とは無縁でいられるってわけよね!?　こんないいことってばないわ――――！）

目先の欲望――読書欲――に目のくらんだナルレイシアは、一も二もなくその申し出に飛びつき……そうして、彼女の『不幸中の幸い』伝説は、ついに王都にまで持ち越されることとなったのである……。

1

ディエーン王国王都ロスタロイド――。

貴族の屋敷が建ち並ぶ東地区の外れに、他と比べるといささか小さめといえる屋敷があった。

小さいとはいえ、粗末というわけではない。

きちんと手を入れられた庭には数々の花が咲き誇り、木々はあざやかな緑を纏っている。屋敷もまた、外観こそ派手ではないが、なかに入れば、上品で質のよい調度が揃えられており、初めてこの屋敷を訪れた者は皆、目を瞠るほどだ。

さまざまな逸話を以て、魔法屋敷と呼ばれている不思議の空間である。

そんな屋敷の応接間に、ひとりの青年がいた。

なにか面白くないことがあったのか、黒髪に紫の瞳を持つなかなかの美丈夫は、不機嫌な面持ちのまま、差し出された香茶を受け取った。

「まあまあ、カールったら、いつまでそんな顔をしているつもりなの？」

おどけたようにそう尋ねたのは、この屋敷の主人である女性だった。

歳の頃は五十代初めといったところだろうか、艶やかな銀髪に、青灰色の瞳が美しい女性である。

カールと呼ばれた青年は、相変わらずの仏頂面で、不機嫌そのものといった声で答えた。

「いつまで、とは……もちろん、あなたが気を変えて下さるまでですよ」

その言葉に、老婦人は小さくかぶりをふった。

「そんなことを言われても……ねえ。あちらはもう、こちらに向かってるはずなのだし、第一、独り暮らしをやめるように言ったのはあなただったじゃないの」

「わたしは、信用できるきちんとした人間を側に置くように、と言ったんです！　醜聞持ちの田舎娘を引き取れと言った覚えはありません！」

かなり苛立っているらしく、青年の声は刺々しい。

それというのも、目の前の女性が、彼の言葉を真面目に受け取ろうとしないからだ。

「まあ、カール。噂を鵜呑みにするだなんて、あなたらしくもないこと。ちゃんと説明したでしょう、そのお嬢さんは被害者なのだって。可哀相に……好きでもない男性に積極的に口説かれるのは、あまり心地よいものではないのよ」

結果、問題の『田舎娘』は、相手の男に肘鉄を食らわせたというわけだ。

「確かにその通りなら、同情の余地はあるでしょうがね。調べてみたところ、その娘は件の子息に対して、はっきりとした意思表示をしてなかったようなのですよ。まるで焦らしているようだった、との報告も受けてます」

老婦人は、あきれたように目を瞠った。

「カール……まさか、あなた、人をやって調べさせたの？」

そこに非難の影を感じ取ったのか、カール――ガスカールは心外そうに老婦人を見つめた。

「あなたの側に、不審な人物を置いておけるはずがないでしょう?」

「不審だなんて……あなたが差し向けたひとは、彼女の目当てがその男爵家の書物だったという話は報告して来なかったの?」

「報告はありましたが、どうにも信じられませんね。元々フィレア地方は女性の教育に熱心ではないし、その娘の生家でもそれは同じだったようですからね。それでも最低限の教育を受けさせようと、父親であるダカール氏が選んだ教師の講義を逃げ出しては、山に遊びに出かけていたという話です。とても、向学心旺盛とは思えませんよ」

だから、書物読みたさに、気に食わない御曹司の態度にも我慢していたとは思えない——そう告げる青年に、老婦人はふう、と息をついた。

「あのね、カール」

しかし、ガスカールは自分の正しさを主張しつづける——まるで、そうせずにはいられないかのように。

「さらに付け加えさせていただくなら、その娘はとうに……少なくとも昨日には、こ

こに到着していなければならないはずでした。それが、今日もそろそろ都門も閉まろうというこの時刻になっても来ないばかりか、連絡ひとつ寄越そうとしない。そんなだらしない娘がこの屋敷に住むなど、賛成しかねますね」

「カール……」

さすがにその件に関しては、庇う材料のない老婦人が言葉に詰まる。

得たりとばかりにガスカールはうなずき、さらに言い募ろうとした――が。

そのとき、である。

時を知らせる鐘の音が聞こえた。

紫朔の鐘だ。

ガスカールは一気に香茶を飲み干し、ソファから立ち上がった。

「もうこんな時間か……申し訳ありません、ファティ・リンシャ。そろそろお暇させていただきます」

「ええ、カール。わかってますよ。お仕事頑張ってね」

でも――と、リンシャと呼ばれた老婦人は微笑みながら宣言した。

「あなたがどんなに反対しても、そのお嬢さんが来たら、わたくしは歓迎するつもりですからね。どうしても阻止したいのなら、わたくしがぐうの音も出ない決定的な事実を持ってらっしゃいな。言っておきますが、あなたが遣わしたというひともあなたも、少々視野が狭くてよ」

言うだけ言って、老婦人はさっさと私室にこもってしまった。

放り出された格好になったガスカールは、首をひねりつつ玄関へと進み——そうして扉を出ると同時に、いつもの癖で把手に手を伸ばした。

……開かない。

たった今閉めた扉が、である。

鍵なぞもちろんかけた覚えもない。にも拘わらずのこの不思議。

魔法屋敷と呼ばれるゆえんである……。

「な、なんとか間に合った……」

肩で息をつきながら、両手いっぱいの荷物を引きずるようにして、ナルレイシアは閉まったばかりの都門を振り返った。

（とは言っても大遅刻だわ……余裕をもって出立したはずなのに……）

返す返すもジンクスが呪わしい。

まずはこの季節には珍しい嵐のせいで二日ほど宿に足止めを食ったのが、そもそもの始まりだった。

ようやく動けるようになったところ、今度はその嵐のせいで最寄りの橋が落ちたため、迂回路を選ばざるを得なくなった。舗装状態のあまりよろしくない道はぬかるんでおり、そのせいもあってか乗り合い馬車は思うように進まず、しかも止めとばかりに脱輪事故まで起こる始末。

ほとんど呪われているとしか思えない。

まあ、唯一の救いは、同郷の人間が居合わせなかったこと、だろうか。故郷のフィレアにおいて、彼女の『不幸中の幸い』伝説はかなり有名で、そのことを知っている

者がいたら、きっと全部ナルレイシアのせいだという話になっていただろうからだ。

言いがかりだと反論したいのはやまやまだが、いかんせん過去の実績（？）がありすぎる。

到底、信じてはもらえぬこと請け合いである。

なんとか今日中には目当ての屋敷にたどり着くことはできそうなのだが——それでも。

（本当なら昨日の午後一番にお訪ねするはずだったのに……一応、嵐の後、もしかしたら少し遅れることになるかもしれないって手紙は出しておいたけど……大丈夫よね？　事情が事情なんだから、いきなり遅刻を理由に返品扱いにはならないわよね？）

彼女はその手紙もまた送り主の運に支配され、未だ宛て先に届いていないことを知らなかった——ついでに言うなら、すでに屋敷の関係者に『返品』熱烈希望されていることも。

この時点でそのことを知ったなら、さすがの彼女もへたりこんだかもしれない。

だがまあ、知らぬが仏という言葉もある通り、知らぬからこそ、ナルレイシアは元気を振り絞ることができた。二度目の脱輪のせいで、ロスタロイドまで三里半ほど両手いっぱいの荷物を抱えて歩いてきた疲れは生半ではなかったけれど。

荷物のなかには、故郷の恩師である老人から餞別に貰った本が十冊ほども入っている。どれもフィレアの田舎ではまずお目にかかれない貴重な書物であったため、持参することを選んだのだ。

家に置いておいては、彼女の読書好きを快く思わない父親に、さっさと処分されてしまいそうだったし、郵便公司で送ったあげく、行方不明になってはたまらないと思ったのだ。過去何度もその手の事故で、送ったはずの手紙や荷物が相手に届かなかった前科を持つ身としては、まだしも直接持っていたほうが、紛失する確率は低いと判断したわけである。

断っておくなら、郵便公司のその手の事故は、そうそうあるものではない。個人で片手の指では足りないほどの事故を起こしたのは、少なくともフィレア中を探してもナルレイシア以外にはいないと言ってもいい。

ただし、その決断のおかげで、最後の一里が地獄だったのは確かだった。

たかが紙の束と侮ることなかれ。本というものは、冊数がかさむと、むやみやたらに重くなる代物なのだ。最後の方では、腕がもげるような思いを味わわされた。

（でも、まあ、もうロスタロイドだし。入っちゃったし。後は誰かに尋ねれば、ファヴァイナ夫人のお屋敷はわかるだろうし……）

かなり……けっこう、苦労させられたものの、ここまでくれば、さすがに『不幸』も打ち止めだろう。

そう思ったナルレイシアは、すぐに自分の読みの甘さを呪うことになる。

なぜなら、行き交う人たちにさんざん尋ねたにも拘わらず、誰もファヴァイナ夫人の屋敷を知らなかったからである。

（都でも有名だから、人に聞いたらすぐわかるって……そう言ってたくせにっっ！お師匠様の嘘つき――――っっっ！）

ナルレイシアは途方に暮れてしまった。

「どうしよ」

（このままじゃ、今夜中探し回ったって、たどり着けないじゃない。腕はもう抜け落ちそうだし、手にも足にも肉刺いっぱいだし……）

それでも相当な重量を誇る書物を手放そうとは思わないあたり、彼女は生粋の書物馬鹿だった。

が、しかし。こうまで探すのが難しいようなら、せめて今夜の宿ぐらいは確保すべきだと彼女は思った。

着いたらわかる――とは言ったものの、故郷の師匠は一応地図というか、案内図をつけてはくれた。かーなーりー大雑把で簡略すぎる代物だとしても、だ。

方向音痴のナルレイシアのための――実はこれが一番の餞別だったかもしれないのだが――略図の存在を思い出し、彼女はぱぁっと顔を輝かせた。

「そうよねっっ!?　師匠の言うことがどこまで本当かはわからないけど、この地図見せたら、きっとどこらへんにあるお屋敷なのかぐらいは、きっと教えて貰えるわ！」

だがしかし、すでに街は閉門後――。

歓楽街らしき方角ばかり賑わっているとあっては、やはり本日中にたどり着くのは

難しい……だろう。

となれば、やはりここは、安心できる宿を取って、明日の朝一番で役所に聞きにいけばいいのだ！

「……っていうか、わたし、馬鹿？　そういうことなら、都門潜ってすぐに尋ねれば良かったんじゃないの――――」

後悔先に立たず――。

いや、でもまだ遅くはないかも。

「侵入者を警戒して、大抵、門の警備兵ってば交代で一晩中いるんだよね」

だったら、今夜中に着くのは無理でも、明日一なら、きっと大丈夫。

「よぉっっし、頑張るぞおお！」

雄叫びをあげた彼女は、かなり目立っていた。

恥ずかしくなり、こそこそと身を隠そうと荷物に手を伸ばした時、思いがけぬ衝撃に目を瞠った。

誰かにぶつかったのだと気づいたときには、すでにバランスを崩していた。

ごつん、と後頭部に　鈍い刺激。
（はう？）
そうしてナルレイシアは昏倒した。

「なんということだ！　お前というやつは、自分がなにをしたのかわかっているのか!?」
耳を塞がずにはおれない大音声で怒鳴りつけられる。
（あれ？　なんで父さまがいるわけ……？　ここはロスタロイドのはずなのに……）
考えてみるがわからない。
（まさか、やっぱり都に出るのはだめだって、連れ戻しに来たとか……？　あれ、でも……この部屋……）
半月ほど前に出てきた自宅の居間だった。

「行儀見習いに行ったお宅のご子息を怪我させるとは何事だ!?　お気の毒にご子息は、肋にヒビの入る重傷なのだぞ!?」

ダカール家の家長であるリンレイド・ダカールは、怒りに顔を真っ赤に染めていた。

ダカール商会の社主である彼は、外でこそ温和な紳士と評判なのだが、こと二番目の娘が絡んだ場合、がらりと印象が変わる。

「お言葉ですが、お父さま。あの男はひとの言うことなんか聞きもしないろくでなしだったんですよ？　あのまま上品ぶってたら、不本意な思いをすることになったのはわたしの方です。あれは正当防衛です」

はっきりきっぱりと反論しているのは……。

（わたし、だわ……ああそうか、これは夢なんだ）

眠った覚えはないのだが、時間を遡ったわけでもない以上、これは夢に違いない。

なにしろ、件の馬鹿息子に肘鉄を食らわせたせいで、男爵家を追い出された直後のやりとりなのだから。

（最悪……。なにも、寄りにもよってあんなこと、夢に見ることないのに……）

とは思うものの、夢の内容は自分では選べない。

「それとも、お父さまは、わたしがあの男に逆らわず、従うべきだったとおっしゃるの？」

さすがにこれにはリンレイドも言葉を失った。

「誰もそんなことは言っておらん。ただ、もっと穏便な断り方もあったろうと言っておるだけだ。怪我させるのはやりすぎだ」

おかげでお前は手のつけられない乱暴者だと評判が立ってしまったのだぞ――そのことがよほど腹立たしいのか、彼の双眸に再び怒りが宿った。

「わたしに言わせれば、あの程度のことで骨にヒビが入るほうが信じられませんわ。よっぽど甘やかされて育ったんでしょうね。おまけに食べ物の好き嫌いも多くて、きっと骨を強くするものを食べてなかったんですわ。もっとも、あんなろくでなしが体力自慢だったりしたら、被害は拡大する一方だったでしょうから、好き嫌いしてくれて良かったのかもしれませんわね」

「減らず口を叩くのはやめろ！　まったく……裏山の妖怪爺ぃに、妙な知恵をつけられおって……」

老人は敬うもの、大切にするものだという考えが浸透しているフィレアの風土にあって、このリンレイドのセリフは異端と言ってもおかしくないものだったが、ナルレイシアは――もちろん、他の家族も――知っている。

幼少時にからかわれたせいで、リンレイド氏が件の老人だけは世のそれの範疇から外して嫌いまくっているのだということを。

ナルレイシアが自分の言うことを聞かず、老人の住む小屋に頻繁に出向くようになり、そのせいでますます手に負えなくなってからというもの、彼の『妖怪爺ぃ』への拒絶反応はますます悪化の一途をたどり、いまではほとんど最悪の状況だった。

ナルレイシア自身、父親の幼少時からすでに老人だったという師匠の年齢を考えると、『妖怪』の呼び名は否定しがたく思えるわけだが、いくら父でも恩師への暴言は聞き捨てならなかった。

「お父さま、お師匠様を悪く言うのはやめてください。お師匠様は、最低限身を守る

ためのコツを教えて下さっただけですわ」

　実のところを言えば、人体の急所全箇所、急所ではないが相手の意識あるいはやる気を奪う効果的箇所など教えて貰っていたわけだが……ここではそのことは黙っておく。

「しかしそのせいで、お前は人間凶器扱いされたんだぞ!?」

　娘たちには、多少おっとりしていようとも、良き妻、良き母になる素質こそ高めて貰いたいと思っているリンレイドのセリフには悲壮感が溢れていた。

（……でも、あの時はまだ、ましだったのよね……。追い出された直後だったし、まだただの乱暴娘ってことだったし……）

　それでも、嘆かわしいを繰り返すばかりの父親に、つい突っ込んでしまった際の答えだけは忘れられないし……安堵も覚えた。

「じゃあ、お父さまはッッ！　わたしが自分で自分のことも守れない非力で従順な娘で！　あのろくでなしに良いように口説き落とされて！　下手したら未婚の母に、望んでもないのになりかねないのに、抵抗なんてするべきではなかったとおっしゃるん

ですか!?」

反応は早かった。

「誰がそんな話をしている!? わたしが言いたいのは……」

と言いかけ、リンレイドはくるりと娘に背を向けた。

「言いたいのは、だな……。その、本当に……大事なかったか？」

「触られただけで鳥肌のたつような相手に好き勝手なんかさせません」

そこを心配していたのかと、少しだけナルレイシアは安心した。

よもやまさかとは思ったものの、既成事実を楯に正式な縁談に持ち込むつもりではなかったのかと、つい思ってしまったのだ。

フィレアにおいて、家長の権限は強い。

ダカール商会は、フィレアでは名士と名高いが、地方の富商に過ぎないのも事実。

だが、そこに新たな人脈が出来たなら？

たとえば……そう、ナルレイシアが行儀見習いに出た男爵家とか。

商売と家族を秤にかけたとき、父がどんな判断を下すか、少しだけ……いや、実は

結構、かなり……気になっていたりはしたのだ。

だから、そのひとがぽそりと洩らした言葉に、心底から安堵し、同時にその心を疑った我が身を結構情けなく思った。

「ん。まあ……よくやった。怪我させたのはやりすぎだが、まあ、自衛は当然の権利というものだしな」

それで、すべては丸く収まるはずだった……のだ。

なのに収まらなかった原因は。

恥知らずにして受けた痛みは倍返しにしなければ気がすまない馬鹿息子が、それこそないことないこと吹聴しまくってくれたおかげである。

（わたしが男なら、迷わず決闘を申し込んでたところだわ！）

いまさらながらに怒りを掻き立てられ、ナルレイシアは思った。

（後であんな悪質な噂流すだなんてわかってたら、あの時きちんと息の根止めてあげたのに）

もう遅いけれど――と思った意識がいきなり、乗り物に乗せられたかのように移動

……否（いな）、浮上していく。

（ああ、夢から覚めるんだわ）

ナルレイシアはその運びを認識した。

2

（あ、いい香り……ラワンデルだわ）

最初に気づいたのは、紫色のかわいい花の香りだった。

（んー、なんか頭が痛いような熱いような……コブができちゃってるわね、これは。えっと、どこにぶつけたんだっけ……？）

一所懸命記憶をたどるが、よく思い出せない。

（なんとかロスタロイドの閉門には間に合って……それからファヴァイナ夫人の屋敷を探したんだけど全然見つからなくて……それで……）

「思い出した！」

叫ぶなりナルレイシアは勢いよく起き上がった。

「あーの酔っぱらいがぁぁっっ！」

ぶつかってきたせいで、バランスを崩したのだ。

そのあとのことは覚えていないから、意識を失ったのはそのせいだろう。現にその時打ったと思われる後頭部がずきずきと痛む。

さわさわと頭に触れてみると、思った通り、コブができていた。二三日は、髪を梳るのが大変だろうと思った彼女は、結っていたはずの髪がとかれていることに気づいて目を瞠った。見れば、枕がわりに水を詰めた革袋が置いてある。

コブを冷やすための処置だとはわかるが——ついでに言えば、肉刺だらけになった両手と両足には、包帯がまかれている——ここで気になるのは手当てをした人物である。ここが故郷のフィレアなら、まず感謝の念を覚えるのだろうが、いかんせんここはロスタロイド。

生まれて初めて足を踏み入れた街であり、当然知り合いのひとりもいないのだ。

そんな場所で、しかも思いがけない事故で気を失った身としては、目覚めた際に髪を解かれ、さらには靴と靴下を脱がされていたというのは……かなり由々しき事態で

ある。

……まあ、よほどに運が悪くない限り、放っておいても支障のない怪我を手当てしてくれた相手だ、悪人とは思えないし思いたくもないのだが、相手が男性であったなら、少し警戒してしまうかも、と思った。

故郷での人生最大の不愉快事件の痛手は、まだ完全には癒えてはいないのだ。

だから――。

「あら、気がついたのね」

扉を開けて入ってきたのが、いささか派手で、且つ露出度の多い衣装を身につけているとはいえ、れっきとした女性だったとき、ナルレイシアはこっそり安堵の息をついたのだ。

「あの……わたし、どうして……」

ここにいるんでしょうか、と尋ねかけた彼女は、だが、それより先に言わなければならないことがあったことを思い出した。

「あ、手当てして下さったのですよね。ありがとうございました」

深々と頭を下げて感謝の言葉を口にしたナルレイシアに、なぜだか顔を出した女性はきょとんとした顔になり、次いでぷっと吹き出した。

「あの、なにか……？」

変なことでも言ったのだろうか。

首を傾げた彼女に、二十代も半ば過ぎに見えるその女性は、「いえいえ」と笑いながら答えた。

「やあ、ちょっと新鮮で……。そうそう、スカーを呼ばなくっちゃね。そのたんこぶと肉刺の手当てをしたのはあたしだけど、あんたを運んできたのはスカーなんだから。礼なら彼に言ってやっておくれね」

どういうことなのかと尋ねるより先に、その女性は怒鳴りつけるように大声を放った。

「スカー！　お待ちかねのお嬢さんがお目覚めだよ！」

その、けっこうな大声にも驚いたが、扉から現れた救い主の姿を目にしたときは、それどころでなく驚かされた。

なぜと言って、スカーと呼ばれる青年は、彼女がこれまで見たこともないぐらいに美しい青年だったのだ。

緑がかった金色のまっすぐな髪はさらさらのつやつや。睫毛は長いし鼻は高いし、唇は少しだけ薄いけれど形はいいし、何より神秘的な灰緑色の瞳――。

人外の存在だと言われても、素直に信じてしまいそうな……それほど卓越した美貌の青年だった。

（人とは思えないぐらいに綺麗……。きっと、世界を支える柱神さまって、きっとこんな姿をしてらっしゃるんだわ）

声も忘れて見とれてしまったナルレイシアに、スカーと呼ばれた青年はにっこりと微笑んだ。

「良かった、気がついたんだね。頭は痛くない？」

天の御使いもかくやという美貌の主は、その声までも美しかった。

決して女性に間違われることはない、けれど不思議と耳をくすぐる穏やかな低い声に、ナルレイシアは心地よさを覚えた。

好ましい声だと思っただけではない。本当にその声を聞くだけで、心がふわりと休らいだ——そんな気がしたのだ。

（間違ってひとの身に生まれ落ちたとしか思えない方……あの馬鹿息子が都風（みやこふう）だとか言うレースたっぷりのブラウスを、自慢げに着てたときは、都って、なんて悪趣味なんだろうって思ったけど、ああ、この方なら似合うわ、この上なく！）

ついでにナルレイシアは馬鹿息子の顔を、目の前の青年のものと入れ換えて、その姿を想像してみた。

ため息が出るほど似合っていた。

広い世界のなかには、レースやフリルが厭味（いやみ）なく似合う男性もいるのだと、認識を改めた一瞬だった。

人間、顔がすべてではない。

そうは言っても、やはり人間、見た目に左右されるものだ。ここまで見事な外見の主ともなれば、笑顔ひとつで簡単に——よっぽど勘（かん）が鋭かったり、人生経験を積んでもいない限り——他人の好意は勝ち取れる。



実際、ナルレイシアがそうだった。

ぼうっとしたまま、礼を言うのすら忘れ、彼女は実に三分弱というもの、ひたすら彼の顔に見とれていたのだから。

そんな彼女の態度に、小さく苦笑した後、スカーと呼ばれた青年はさらに声をかけてきた。

「医者の見立てでは大したことはないという話なのだけれど、本当に大丈夫？　打ったのが頭の場合、思いがけない後遺症が出ることもあるという話だし。見たところ、ロスタロイドに着いて間もないようだけど、名前を尋ねてもいいかな？」

相変わらず、青年の顔に見とれていたナルレイシアは、素直にうなずいた。

「はい。ナルレイシア・フォイリリル・ダカールと申します。ロスタロイドには先程着いたばかりで――」

そこまで答えて、ナルレイシアは重大なことに気がついた。

「に、荷物はっっ!?　わたしの本っっ!?」

慌てて寝台のそばに目をやったが、見慣れた鞄は見当たらない。

（そ、そんな……！　まさか、わたしが気を失ってる間になくなっちゃったとか!?　せっかく師匠からいただいた本が詰まってたのにぃ!?）

暗黒時代以前の貴重な書物を、自分の不注意で失ったなど、言語道断の不覚というものだ。

「ああぁぁぁっ！　『カディスティンにおけるアディティーラ一族の役割』も、『在りし日の学都』も『さる柱神のわがまま』も!?」

なくなってしまったの!?

「そんなのってひどいわ！」

だが、それは彼女の勘違いだった。

両手で頭を抱えこんでしまったナルレイシアに、青年が笑いながら教えてくれたのだ。

「いや、君のものとおぼしき荷物なら、別室に置いてあるから安心して。ただ、なくなったものがないかどうか、後で確認して欲しいんだけど……ね。なにしろわたしが見つけたときには君は倒れていたし、荷物もばらけていてね。事故か、追い剝ぎかな

にかの犯罪か、判断がつかなかったんだ。だから、出来れば意識を失ったときのことを話して欲しいんだ」

こちらが不安を覚えないように、柔和な笑顔で告げられた言葉に、ナルレイシアはほっとすると同時に、少しだけ考えた。

「もちろん、それはかまいませんけれど……あの、もしかして警邏の方なのですか？」

とてもそうは思えず、だから思い切って尋ねてみたのだ。

まあ……顔から職業がすぐにわかる人間ばかりではないのは確かだから、即座に嘘だと決めつけるわけにはいかないが……。

街中で何人か見かけた警邏隊員が身につけていた制服姿でないということも、非番なり、特別任務中なりの理由で、完全否定するだけの説得力は持たないから、やはり頭から疑ってかかるのはどうかとは思う……思うが、しかしである。

なんというか……決定的に、似合わないと思うのだ。

（顔だけじゃなくて……うーん、物腰？　あと身にまとってる空気とか？　なんか

……なんだか、違う気がする……）

フィレアは片田舎だが、商人である父を訪ねてくる客人は、ディエーンはおろか、外国のひとも少なくなかった。

そうしたひとびとを、幼いころから見慣れてきたナルレイシアは、青年の言動に引っ掛かりを覚えたのだ。

だから――彼が笑顔で「違うよ」と答えたとき、なぜだかほっとすると同時に、さらなる疑問を抱えこんだ。

「警邏隊長のひとりが知り合いで、この間会ったときもロスタロイドの治安についてグチばかり聞かされてたというのも、君を見つけたときに放っておけなかった理由のひとつではあるけどね。ただ、わたしが積極的に君に係わろうと思ったのは、君のそばに散らばっていた荷物に興味を引かれたというか……えぇっと、ヴィル？　それとも、若いからまさかと思うけれどヴィスル？」

ヴィルは未婚女性への、ヴィスルは既婚女性への敬称である。

「……ヴィルでお願いします」

と答えた彼女に、青年は真剣この上ない面持ちで懇願してきた。

「ヴィル・ダカール！　不躾は承知ですが、どうか、あなたの書物を譲ってください！　路上にこぼれていたあの本の題名を目にしたとき、心臓がとまるかと思いました！『虹神の支配下にある時代とその季節属性』！　暗黒時代に失われたと信じられていた、あの稀書を、まさかこの目でみる事が出来るとは！」

熱意たっぷりの青年の態度に、ナルレイシアもひとつ、気がついた。

（まーあ、このひとってば、もしかして、同志!?）

書物馬鹿は――あまり理解者が多いとは言いかねる趣味を持つ者の悲しさと言うべきか――共通の話題を持ち得る相手との邂逅を、無条件に歓迎するという傾向がある。

「え、え、でも……すみません。それはまだ読んでなくて……」

だからお譲りするわけには――と言ったとたん、青年はがくりと肩を落とした。

「……そうですか……」

その様子があまりに悲しげだったので――絶世の美貌の主が落胆した様子を見せる

だけで、なにやらこちらの方が悪いことをしたような錯覚を覚えるとは……いささか理不尽な気がしないでもないのだが――ナルレイシアは思わず声を上げてしまった。

「あの、もし宜しければお貸ししましょうか……？　あ、わたしこちらで働くことになってますので……」

師匠からの餞別、しかも未読の書物を他人に譲ることなどできないが、相手が同好の士ならば、貸してあげるぐらいのことは構わないはず……と、そこまで考えて、ナルレイシアははうっっ、と息をついた。

肝心の勤め先がどこなのか、説明しようにも説明できない現実を思い出したのだ。

しかも大遅刻を犯してしまった身としては、簡単に約束などできはしない。

「そうだわ！　ファヴァイナ夫人のお屋敷！　まずはそのお宅を探し出さなければならないというのに……！」

（ああ、でも遅刻したせいでとっくにお役御免になってたらどうしよう？　いくら不幸中にも幸いがあったからって、今度だってそうだとは限らないのだし、第一、クビにならないのがその幸いだなんて決まってやいないんだわ！）

真っ青になってしまったナルレイシアに、またしても救いの手をさしのべてくれたのは、緑がかった金髪の、ひととは思えぬ美貌の主だった。

「……ファヴァイナ夫人？　のお屋敷が君の次の勤め先？　本当に？」

いつものナルレイシアなら、その声に宿る不審の響きにすぐに気づき、反発していたことだろう。

だがこのときの彼女には、青年の声に宿る、意外そうな――本人を知る者ならではの――響きこそがすべてだったのだ。

「そうです！　故郷の恩師の紹介で……でも嵐のせいで足止めされるし橋は壊れるし、おかげで迂回路を通らざるを得なくなるしで……二十日も余裕を見て出てきたのに、結局は遅れてしまうし……それでも恩師は都に着けば、ファヴァイナ夫人は有名だからすぐに見つかるって仰ってたのに全然見つからないしッ！　わたし、もう、どうしていいのか……」

言っている内に涙がこみ上げてきた。

いっそ泣いてしまいたかった。

だが、ここで泣いたところで事態が好転するわけでもないことを、ナルレイシアは知っていた。

だから――。

彼女は青年の手をひっしと握りしめ、必死と顔に書いたような表情で訴えかけたのだ。

「ご存じなんですか、ファヴァイナ夫人のお屋敷!?　だったらお願いです、教えて下さい！　連れて言って欲しいだなんて贅沢は言いません！　教えていただくだけでいいんです！　お願いです、お願いしますからっっっっ！」

後にこの時の彼女を評して、青年はこんな感想を残している。

「頷かなければ食べてやると言われてるような気がしたよ」

と。

そうして、こうも言った。

「あれだけ生命力に溢れてると、色々大変そうだよね」

どう大変なのかは……恐らく後々明らかになることだろう。

3

高い天井まで届く、巨大な本棚を前に、ナルレイシアは目をきらきらさせていた。

「以前はわたくしがやっていたのだけれど、さすがにこの年になりますと、足元が不安でしてね。一度脚立から足を踏み外したものだから、知り合いに脚立と梯子の使用を禁じられてしまったの」

年はとりたくないものよねえ——とため息まじりに洩らすのは、銀髪が美しい初老の婦人である。

リンシィア・セレナイダ・ファヴァイナ——この屋敷の女主人だ。

そう、指定の日時に間に合わなかったものの、ファヴァイナ夫人は、ナルレイシアの遅参の理由を知ると、怒るどころか逆に心配し、同情してくれたのだ。

もちろん、クビになることもなく、彼女は至福とも言える眺めを満喫している。

（すごいわ……壁一面本だらけ。ずいぶん古そうなものも多いわ。師匠の家にも本がいっぱいあったけど、なにしろ狭かったし……ああ、こんなにたくさんの本、生まれて初めて見た）

これから、この本に囲まれて――正確には違うのだが――暮らせるのだと思うと、それだけで胸がいっぱいになった。

「ですからね、あなたにお願いしたいのは、主に棚の上部の書物の分類と整理ね。なかには補修が必要なものもあると思いますから、そうしたものは分けて下さると嬉しいわ」

もちろん、空いた時間に読むのは自由ですよ。

ファヴァイナ夫人のその一言だけで、他にはなにもいらないとまで思ったナルレイシアは、筋金入りの書物馬鹿だった。

「わかりました。あの、あまり傷みのひどくないものなら、補修できると思いますけど……」

そう言ったとたん、彼女は後悔した。

ここにある書物の大部分は、彼女が見たこともない貴重なものなのだ。素人仕事の補修など言語道断だと怒られても仕方ないのだ。

「申し訳ございません！　わたしったら、とんだ差し出口を……」

慌てて謝った彼女に、しかしファヴァイナ夫人はおっとりと答えた。

「なにを謝るの？　ありがたいことだと思いましたのに。そうなのよね、これだけの量でしょう？　以前調べたときは大変だったの。信用のおけるいくつかの工房にお願いしたのだけれど数が多すぎて、本当にひどい状態のものしか引き受けて貰えなかったのよねえ」

確かに、これだけ膨大な数の書物を整理したら、補修不可欠なものも結構な数出るに違いない。

しかも、ざっと目に入っただけで、相当数の稀書がある。よほどに信用のおける工房でなければ、とても任せることはできないだろう。収集家のなかには、求める本を手に入れるためには手段を選ばない人間も少なくはないという話なのだから。

（あぁぁ、夢のよう……こんなにたくさんの、しかも貴重な本ばかり揃ってるお屋敷に住めるだなんて……。もう、魔法でも呪いでもなんでもいいわ）

うっとりと棚を見上げながら、ナルレイシアは緑がかった金髪の青年との会話を思い出す。

ファヴァイナ夫人の屋敷は、確かに有名だった。ただしそれは『ファヴァイナ夫人の屋敷』としてではなく、『魔法屋敷』、あるいは『呪いの館』の呼び名でのことだったのだ。

四季を問わず花に溢れた庭……はともかく、邪心を持った人間は一歩も門から入れない、それどころか屋敷を見つけることすらできないという話だった。

さらには、屋敷に入ってから魔が差した者は——ナルレイシアも驚かされたのだが、屋敷内の調度や小物のほとんどは、目が飛び出るほどに高価な品だった——即座にロスタロイドの何処かへと放り出され、放心状態のところを発見されるという、かなり荒唐無稽な話まであった。

すべてを信じたわけではなかったが、ナルレイシアはひとつの可能性を思いつき、

それゆえに真っ青になって青年に問いかけた。

「わたし、もしかしてそのお屋敷に嫌われてるんじゃ……？　だから、そんな有名なはずのお屋敷のこと、みんな知らないって言ったんじゃ……」

この言葉に、青年は軽く目を瞠った。

「君、面白いことを言うねえ。普通、こういう話を聞いたら、信じられないと一蹴するか、心当たりがあったら周囲に気づかれないよう平静なふりをしたりするものだけど」

「それは……確かにわたし、本が大好きですから、そのお屋敷にどんな本があるのかって考えただけでどきどきしますし、ものすごく気に入った本が見つかったりしたら誘惑を覚えるかもしれませんけど……でも、初っぱなからこうだなんて。前科があるだけに、気のせいとか思えないんです」

言葉回しが珍しかったのか、青年は突っ込んで尋ねてきた。

「前科？」

今にして思うと、あれは一種の誘導尋問ではなかったのかと思うのだが、そのとき

はナルレイシアは気づかず頷いた。

「ええ。一カ所だけ、別荘で相性の悪いところがあったんです。父が避寒地に選んだんですけど。そこに行こうとするとわたし、必ずと言っていいほど体調崩しちゃって。一度や二度なら偶然ってこともあるでしょうけど、行こうとすると毎回なんです。もう、絶対来るなって言われてるみたいで。そのことを師匠に話したら、相性の問題で、嫌われてるだけなんだから気にすることはないって言われて……」

「……相性……」

「でもっっ！　そんなのって納得できませんよね!?　相性はともかく、一方的に嫌われるなんて絶対イヤで……その年の冬は、なにがなんでも行ってやるって頑張ったんです。熱も出たし移動するごとにどんどん体調悪くなっていったけど。なんかもう、話をつけなきゃ収まりが着かないというか、後には引けない気分というか……そうしたら……」

当時のことを思い出し、ついがっくりと肩を落としたナルレイシアに、青年はしかし遠慮なく、先を促してきた。

「そうしたら……どうなったの？」

「異常気象による季節外れの大雪が降ったんです。雪なんか滅多に降らない地方だったものだから、当然道は封鎖されて。しかも、泊まっていた宿が雪崩に巻き込まれて……」

青年が、さすがに息を呑んだ。

「……よく、助かったね。」

大まじめに頷いたナルレイシアである。

「わたし、フィレアでは『不幸中の幸いの権化』なんて呼ばれてますけど、あのときばかりは死ぬかと思いました。でも、結局は家族全員助かって……でもさすがに体力限界だったみたいで、家族みんなでフィレアの屋敷に戻ったんです。そうしたら、異常気象は治まるし、体調も戻るしで……師匠に『ほれ見ろ』と言われたときには、目の前真っ赤になるかと思いました」

この台詞に対し、青年はしばし沈黙した後、こう告げた。

「……だから、あの屋敷にも嫌われてると？」

ナルレイシアは頷いた。

「もちろん、そうじゃないと思いたいけど……でも、ここまで邪魔が入るのって、あのとき以来なんですもの。お師匠様は確かに父さまには妖怪なんて呼ばれてる……まあ、実際人間離れした方だけど、嘘を仰るような方じゃないんですもの。そんなお師匠様が『ロスタロイドに着けばすぐにわかる』って言ったのに、ここまで見つからないだなんて……」

ナルレイシアがへこんでいたのには理由があった。

彼女の荷物のなかから、故郷の師匠から餞別に贈られた書物の内三冊が、消え失せていることがわかったからだ。

彼女の嘆きは深かった。

「ああ、せっかくいただいたのに……『秘宝の真理』に『消えた柱神の秘密』に『傲れる者の導きし道』……！」

こんなところで失くすとわかっていたら、真っ先に読んでおいたのに！

叫んだ瞬間のことだ――青年がぴくりと反応した。

「……『秘宝の真理』と『消えた柱神の秘密』と『傲れる者の導きし道』……？　なくなった書物の題名は、確かにこの通りなんですか？」

異様なまでの迫力で問いかけてきた青年に、ナルレイシアはこくこくと頷いた。

「ええ……はい」

なにやら恐ろしいものを見たような気がして、動揺してしまった彼女に、人間とは思えぬ美貌の青年は、それはそれは美しい笑みをたたえて、こう告げた。

「ご安心ください。貴重な書物を、その価値もわからずに盗み取った輩から、必ず取り戻してさしあげましょう。そしてかけがえのない同志として、あなたの憂いを晴らしてさしあげましょう。その代わりといってはなんですが……」

ここで青年は声をひそめ、ささやいた。

「無事、取り戻した暁には……もちろん、あなたの読了後でかまいませんから、貸していただけませんか？　うなずいていただけたら、お礼にいいことを教えてさしあげましょう」

もちろんナルレイシアに否やはなかった。

「……いいこと、ですか？」

首を傾げた彼女に、青年はにっこり笑顔で教えてくれたのだ。

「そう、あなたがその屋敷に嫌われてるというのは完全な誤解だということをですよ。フィレアにいらっしゃるあなたの先生は、少しばかり言葉の選び方を間違われたようですね。あなたが『ファヴァイナ夫人の屋敷』ではなく『魔法屋敷』なり『呪いの館』なり『ファティ・リンシャの屋敷』と言っていたら、誰もがすぐに教えてくれたはずですよ」

「ファティ・リンシャ……？」

ファティとは高位の貴婦人に対する尊称である。

「そ、そんな、位の高いご婦人なんですか!?」

隠遁生活を送る師匠の紹介ということで、裕福ではあってもそこまで身分的には高くない方だろうと信じていたナルレイシアは動揺した。

頭の中で、不安がぐるぐる渦巻いた。

（貴族……貴族のご婦人ってことよね!?　だとしたら、もしかして礼儀作法には目茶

苦茶厳しい方だとか？　でもって気難しかったりしたら……うわーん、どうしよう!?）

自慢ではないが、これまで上流階級の貴婦人に気に入られたこと皆無の身なのだ。

一度は浮上したものの、再び未来は暗いものだと思えてきた。

だが、そんな不安は、青年のそばにいて、それまでずっと成り行きを見守っていた、気風のいい女性によってぬぐい去られた。

褐色の肌の、派手で露出度の高い衣装に身を包んだ女性は、いきなり青年の両頬を、両手でぱちん、と叩いたのだ。

「スカー……スカルトード。あんたの性格はさすがにもうわかってるけど、それでもこんないたいけなお嬢さんをいじめるような真似はもうおよし。ファテイ・リンシャが異様に気さくな方だってことは、あたしらだって知ってることなんだから、さあ」

この台詞に、青年――スカルトードは心外そうに片眉を上げた。

「いじめるだなんて人聞きの悪い……ですが、不安にさせたのならお詫びしなければなりませんね。ファティ・リンシャ……リンシィアさまは、女将の言う通り、大変気

さくな方ですよ。さる神座にあられる方に縁のある方で……」

安心させようと思っての言葉だったのだろうが、これはナルレイシアをさらに動揺させた。

「神座……！」

その意味するところは、ただのひとつしかない。

天と地の間――空間を支える柱神のことだ。

世界は、七人の創造神によって作られたと言われている。虹と同じ色彩をそれぞれが纏っていたために虹神とも呼ばれる。

しかし、世界を作った後、その神々が降臨したことはない――と伝えられる。最初からそのつもりだったのか、それとも結果的にそうなってしまったのかは不明だが、彼らはこの世界の『空』を支える柱神という存在を創造り、恩恵となした。

創世時に百八人――人間が奢り昂った暗黒時代のせいで、その数は半減したものの、彼らの存在は神話やおとぎ話ではなく現実であることを、もはや誰も疑う者はない。

（柱神さまのお知り合い!?　いえ、もしかしたらご親戚かも……!?）

畏れ多いという思いが、どんどんナルレイシアのなかで膨らんでいく。

（そ、そんな大変な方のお屋敷で、わたしなんかができることって……できることって!?）

再び絶望しそうになった彼女だが、パンッ、という音に我に返った。

スカルトードが両手を打ち鳴らしたのだ。

「失礼ですが、ヴィル・ダカール？　もしかしてそそっかしいとか言われませんか？　判断するのは話を全部聞いてからにしましょう、ね？　まず安心していただきたいのは、ファティ・リンシャは我々の同志だということです」

「……同志……」

おうむ返しにつぶやいたナルレイシアに、絶世の美貌を誇る青年は、その魅力を余すところなく発揮した笑顔でうなずいた。

「ええ、彼女は尊敬に値する本の虫であり、書物という書物を心から愛しているひとなのですよ。読書に夢中になって寝食を忘れることも珍しくはないという……」

この言葉は、彼女の心に希望の灯をともした。

さらに甘美なささやきは続いた。

「わたしも縁あって、よくお会いしますが、彼女の蔵書はかなりのものですよ。できるものなら、代わっていただきたいほどです。閲覧はできても、さすがに持ち出しは許していただけませんしねぇ……」

心からのものとわかるため息に、本の虫魂は俄然燃え上がった。

「そ、そんなに貴重な本が……!?」

スカルトードの口調はどこまでも滑らかだった。

「あの屋敷は……いえ、正確に言うならあの屋敷の書庫は、まさに奇跡の具現としか言えませんね。あの屋敷で暮らせるだなんて……もう、わたしから見たら……」

ふうぅ、と大きくスカルトードが息をついた瞬間、ナルレイシアはすっかり乗せられたのだと言っていい。

呪文の言葉は『本の虫』と『膨大な蔵書』――。

あれはもしかしたら、唆されたのでは……と、思わないこともなかったが、そんな

ものは、実際に屋敷を訪れ、書庫の規模と内容を目にしたとたん吹き飛んだ。
（ああぁっっっ！　本当にっっ！　ロスタロイドに出て来て、よかった――！）
心から、彼女は故郷の恩師に感謝した。

4

（こーんなに幸せでいいのかしら？）

明らかに、故郷の父が願うものとは別種の幸福を噛みしめながら、ナルレイシアはロスタロイドでの生活を満喫していた。

なんといっても書物に塗れた日々三昧なのだ。魔法屋敷ことファティ・リンシャの屋敷に住み込んで約十日。

（ああ、一生このまま本に埋もれて暮らしたい……）

というのは紛れもない本音だったが、さすがに自分の手に負えなさそうな破損度の書物が——しかも稀書揃いときている——十冊を数えるとなっては、そうも言ってはいられなくなった……本音を言うならいつまでも、書庫に閉じこもっていたいぐらい

だったのだけれど。

「わたしの手に負えそうなのは、これとこれとこれ……ぐらいかしらね。ここまで劣化してると本職に任せるしかないでしょうし」

工房のほうに連絡を入れ、彼女は取り敢えず十冊ほど持っていくことにした。

いくら広い書庫でも、このままでは本の山脈ができてしまうのは目に見えていたし、そうなっては効率よく動けなくなる。それに工房の都合も考えれば、小分けにして頼んだほうがよかろうと判断したのだ。

その旨を告げると、ファティ・リンシャは快く外出を許してくれた。持ち込む際の馬車の手配までしてくれたのは、本当にありがたかった。『壊れ物』を運ぶ以上、御者の腕は重要な意味を持つのだから。

補修を頼む本を手に、玄関に向かったナルレイシアは、そこに見知らぬ男性の姿を見つけ、一瞬声を失った。

わずか十日とは言え、この魔法屋敷に住み着いた身だ。普通では考えられない事態には何度もぶつかったし、その度に驚かされ……同時に順応してきた。だが、これは

初めてのことだった——少なくとも、呼び鈴の音が聞こえなかったというのに、屋敷の住人以外の人物が、なかに入ってきた、ということは。

邪心を持つ人間は立ち入れないという話だから、その手の心配はしなかったが、なんだか相手の自分を見る目が剣呑な気がして引っかかった。

（ファティ・リンシャの縁の方かしら……？　でもなんだか、わたしを見る目に、ものすっごく険を感じるんだけど……？）

初対面であることは間違いない。

そうである以上、なぜこんな悪意に満ちた目で見られなければならないのか、ナルレイシアにはどうしてもわからない。

それでも、黙って突っ立っているわけにもいかず、内心大いに首を捻りつつ、彼女は黒髪の立派な体格の青年に声をかけた。

「お客様ですか？」

「……そなたは？」

青年は、ナルレイシアの問いに答えるどころか逆に問い返してきた。

好感度、少々低下――しかも、しかもである。

（そなた、と来たわね。多分きっと……このひと貴族だわ）

故郷での馬鹿若との一件以来、彼女のなかにおける貴族への心証はよろしくない。なかにはましなのや、立派な相手もいるはずだとはわかってはいるが、初っぱなから見下した態度を取る相手に対して、なかなか好感は持てるものではない。しかも、青年の自分を見る目には、悪意が感じられる。

（方向性は違うけど、馬鹿若二号、とか……？　ああ、でも偏見はいけない、か。師匠が言ってたけど、高位の貴族の大半は、子供のころから支配者として行動することを教えこまれるものだって話だし）

田舎生まれの田舎育ちにも拘わらず、ナルレイシアは師匠と呼ぶ老人の教育のせい――おかげ、と言い換えてもいいかもしれないが――で、かなり穿った見方をする癖を叩き込まれていた。

師匠である老人は――一体どれだけ生きているのかもわからない、実に恐ろしい老人なのだが――は、ことあるごとに彼女に言い聞かせたものだ。

『良いかな、ナーシャお嬢。身分の高い馬鹿には三種類ある。ひとつは質の悪い救いようのない馬鹿。自分を選民などと信じて、相手を見ようともせずに見下し、支配しようとするどうしようもない馬鹿だ』

あの馬鹿息子はそれに属していた。

靡かぬ相手なら、放っておいてもよかったろうに、意地でも靡かせようとして力業に出ようとした。

まさにあれは『馬鹿の結晶』だったと思う。

『もうひとつは頭は悪くないが融通の利かない馬鹿だな。なまじ確固たる信念を持っておるものだから、自分の判断は絶対だと信じて疑わない。たまに自分の間違いに気づいたときの反応がふたつに分かれてな。自分の全存在が否定されたような恐怖に、結局見なかったふりをする輩と、潔く非を認め、考えを修正する輩だな』

三番目はまだしも救いがある馬鹿と言えよう――などと、説明されたとき、ナルレイシアは正直な感想を口にしたものだ。

『お師匠様、なんだか三番目は全然馬鹿じゃないような気がしますけど……それに、

そういうのって、別に身分の上下に関係ないような……』

『馬鹿じゃのう、お嬢も。相手は選民主義なんぞに凝り固まった輩だぞ？　おまけに面子や矜持が邪魔して、なまなかのことでは自分の考えを変えようとはせんよ。まあ、信念を持たぬ支配者なぞ迷惑なだけじゃから、痛し痒しといったところではあるがな』

師匠の言葉は身も蓋もないようでいて、実は結構底が知れなかったりで、しかも口癖が『馬鹿』なものだから、完全に理解できているのかどうかはいつも不安にさせられる。

ただし、今回の件では、役に立ちそうだった。

（一番目……とは思いたくないわね。なんたって呼び鈴鳴らさずに入って来れるってことは、ファティ・リンシャと親しい方ってことだもの）

明るくて上品で偉ぶらない——しかも本の虫という同志である——老婦人のことを、とっくに大好きになっているナルレイシアはそう思う。

（じゃあ、二番目か三番目……？　でも何だって初対面なのにこんな風に睨めつけて

くるかなぁ？　これじゃあ、こっちだって好意的な対応なんて難しいわよ）

よもやまさか、故郷における事件の内容が、馬鹿若側に都合のいい脚色で伝達済みとは想像もせず、ナルレイシアは仕方なく、もう一度最初の台詞を繰り返した。

「お客様ですか？」

対する青年は、あからさまに馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「ひとの質問を無視するとは、大した礼儀知らずだな」

かちんときた。

（最初に無視したのはあなたのほうでしょうがーっ！）

とは思ったが、彼女は取り敢えず心に『忍』の字を刻む。

あまり自信はないが、我慢することでトラブルを回避できるのなら、やはりそうする価値はあると思うのだ。どうにも許容範囲を超えた場合は別として、ぎりぎりまで争いは回避すべきだと彼女は考えている。

「申し訳ございません。田舎より出てきて間もない不調法者でして……お客様ですか？　申し訳ございませんが、お名前をいただけますでしょうか？」

しかし、これでも青年は、高慢な態度を改めたりはしなかった。

「なるほど、おまえが問題の山猿か。悪いことは言わないから、すぐ帰れ。わたしはお前のような、優柔不断で浮気な者を、この屋敷の住人とは認めないからな」

はっきりきっぱりと、無礼千万なことを口にしてくれる青年を前にして、ナルレイシアは……冷静沈着な外面を保ったまま、切れた。

（そりゃあフィレアは田舎だから、山猿ってのは勘弁してあげるけどっ！　『優柔不断で浮気な者』ってのはなんなのよ!?　自慢じゃないけど、生まれてこのかた、一度だって色っぽい噂なんてたったこともない清廉潔白なこのわたしに対して！）

それはそれで、情けないことと思えないでもなかったが、青年が口にした内容は言語道断の極みである。

（こいつ……師匠の話じゃ最悪部類に入らないかもしれないけど、わたし的には最悪中の最悪かも）

ぴったりの言葉がある。

相性が悪い、というやつだ。

ナルレイシアはすぐさま、意思表示に移った。

書物の破損をこれ以上ひどくしないための、鉄でできた固定器具の詰まった包みを、さりげなく、しかししっかり狙って、青年の足の上に落としてやったのだ。

十冊分、しかも大版のものも混ざっている書物のための器具は相当な重量を誇り、結果、それらを故意に落とされた青年は、反射的に神を呪詛する言葉を吐いた。

「あら、まあぁ♡　申し訳ございません♡」

少々、手元が狂ったようですわ。

にっこりにこにこ笑いながら、ナルレイシアは胸中でささやいた。

（いい気味♡）

……彼女も、実のところは結構、大した性格の主であったのだ。

「……山猿だけあって、大したそこつ者だな」

対するガスカールは、気に入らぬ相手に対しては、効果的な口撃をすることで知られる強者だった。

両者の言葉における戦いはこの後しばらく続き、気晴らしの買い物のために出かけ

ようと思ったファティ・リンシャがなかに入るころには、両者の互いに対する印象は、すっかり固定されていた。

天敵、というのが一番近い言葉かもしれない……。

（まったく、ろくでもないったら……！）

憤懣やるかたない思いで、ナルレイシアはロスタロイドの小道を歩いていた。

ファティ・リンシャは、帰りも馬車で、と手配してくれたようなのだが、重い荷物がなければ徒歩でも充分な距離であったことと、途中で寄りたい場所があったということで、馬車を先に返した彼女は、ロスタロイドに着いて初めての夜、災難にあった自分を助けてくれた店を探していた。

『気にしなくてもいいよ』

とは、あの派手な衣装に身を包んだ女性の言葉だったが、やはりお礼ぐらいはきち

んと言っておきたいではないか。

それに、なくなってしまった三冊の書物の行方が気にかかっている。

（ファティ・リンシャのお知り合いらしいけど、あれ以来お会いできないし……やっぱりきちんとお礼、申し上げたいし……）

そんなことを思っていたせいか、彼女は自分に寄せられる不穏な気配に、切羽詰まるまで気づくことができなかった。

突然、脇道から腕を伸ばされ、口を覆われた瞬間の衝撃といったらなかった。

（……なに!?　いったいなにが……!?）

あまりの衝撃に、凍りついた彼女の耳元で、ささやかれた不穏な言葉――。

「あれは……どこにある？」

（あれ？）

とはなんなのか――問われたところでわからない。

「あれ、って……？」

「とぼけるな！　お前が持っているのはわかってるんだっ！　いいからさっさと返

せ！」

一方的な言葉を投げつけてくる相手の真意が読み取れず、ナルレイシアは思わず眉宇をひそめた。

（あれ、と言われても……）

心当たりはない。

しかし、こうして自分を狙って襲撃してくる以上、なんらかの理由があるのは間違いないように思われた。

さらに言うなら……このままでは拉致されてしまいそうな危険も感じた。

（逃げなきゃ）

と心定め、そのために必要なものはなにかと思案する。

必要なものは、相手に隙を作らせるなにか、だ。

だとしたら……。

「あ、もしかして……」

ぽそりとつぶやいた瞬間、相手の腕の拘束が、わずかに緩んだ。

（当たり、だわ）

胸中でつぶやくなり、ナルレイシアは襲撃者の鳩尾に、全身の力をこめた肘鉄を見舞った。

とたんに拘束が解かれる。彼女は迷うことなく走り出した。

まずい、まずい、ひたすらにまずい！

本能的な部分で、警鐘が鳴り響いていた。

一刻も早く、安全領域に逃げ込む必要があるのだと、このときの彼女の本能は訴えていた。

それは、どこか。

一言お礼を言いたくて、探していたあの夜の救い主の元でないことだけは確かだった。心地よく思えた場所ではあったものの……いや、だからこそと言うべきか、あの場に危険は、たとえひとかけらであっても持ち込みたくはなかった。

では、そうなるとファティ・リンシャの屋敷しかなくなるわけだが、これも気が進まないことだった。



第一、距離も相当あった。
現実に逃げのびられるかどうかの問題が発生する。
不意を突くことで、なんとか逃げ出すことはかなったものの、この先のことはわからないのだ。
第一、襲撃者の質問の意図がわからない。
『あれは……どこにある？』
わけのわからない状況だった。
それでも、ひとつだけわかっていることがあるとするなら、それは逃げ出すべき状況にあるということだった。
理性や常識や、これまでため込んできた知識とは別の次元のこととして、とにかく逃げろと、頭の奥から命じる声が聞こえた。
ナルレイシアは、だから即座にその本能の声に従った……わけだが。
その直後、途方に暮れた。
逃げなければならないのは確かなこととして――どこへ？

という疑問にぶつかったせいである。

最初に目指していた訪問先は……こんなおまけをつけていたのでは論外というもの。魔法屋敷と評判のファティ・リンシャのそれなら、大丈夫ではないかとは思うものの、出かける矢先に、その女主人の馴染み客との間で騒ぎを起こしてしまったことを思うと、やはりやめておいたほうがよろしいように思われる。

となると、避難所は限られてくるわけだが……。

（因縁つけられてる理由さえはっきりわかったら、対処のしようもあるんだろうけど……）

そう、思ったときのことである。

背後から、ナルレイシアは肩をがっし、と掴まれ、懇願とも強制ともつかぬ勢いでこう叫ばれた。

「あれは……どこにある？　返せ！」

異様なまでの迫力に、ナルレイシアは返す言葉を失った。

そうして――。

追跡者を振り切り、必死に逃げた彼女の前に現れたのは――それは。

「スカー……？」

呆れたかのように、あるいは途方に暮れたかのように、つぶやいたナルレイシアの前で、緑がかった金の髪の青年は微笑んだ。

5

書物の整理に夢中になっていたせいで、日常生活を送る上で必要なもの以外、ほとんど手つかずの状態だったのは、果たして幸いと言えるのかどうか――。

謎を胸に抱えこんだまま、ナルレイシアは忙しくほどきかけの荷物を、再び鞄に詰め込んでいた。しばらく別の家で暮らすためだ。

あの後――スカルトードに馬車で送ってもらう道すがら、相談して決めたのだ。あの曲者が言った『あれ』がなんであるのかはわからない。スカルトードにも尋ねられたが、心当たりは皆無だった。

だが、相手が、その『なにか』をナルレイシアが持っていると信じているのは確かなことである以上、このまま放置しておくのは危険だ、と。実際、腕に訴えようとし

たことを考えても、放っておくのは得策とは言えない。

ではどうすればいいのか。

渋面のスカルトードを説得し、彼女が選んだ方法とは――自らを餌に見立てての一本釣り、である。

多少の危険は仕方ないと割り切ってでも、ナルレイシアは早々に事態を解決したかった。いつまでも襲われる心配をするのは精神衛生上好ましくないし、なにより相手が焦ったあげく、暴挙に出でもしたら――と思うと、なりふり構ってはいられない。もし相手に自分の住んでいるところが知られてしまったら、危険はファティ・リンシャの身にまで及びかねない。なにかが起こってからでは遅いのだ。

絶対に、そんな迷惑はかけられない。

そのため、スカルトードの力を借りることにしたのだ。

勤め始めて十日の身で、休みをもらえたのも彼の口添えがあったればこそだった。

最近入手した書物の真贋鑑定を、ナルレイシアに頼みたいとファティ・リンシャに頼みこんでくれたのだ。通常、彼女のような若輩に回ってくるような話ではないはず

だが、故郷の恩師を知己に持つ老婦人は、訝りの念を覚えた様子もなく快諾した……

まあ、少々女性らしい好奇心と悪戯心もあったようだが。

「まあ、まあ、いいことだわ。熱心なのはいいことだけれど、いつまでも書庫に入り浸るのはちょっと、どうかと思ってましたからね。若いうちは、どんどんひととつきあわなくてはね。もちろんナーシャは大切な預かりものだから、人選には気をつけなければならないけれど……スカーなら申し分ありませんものね、うふふ」

最後の「うふふ」が非常に気になるものの、下手につつくと怖い言葉が返って来そうで、なにも言えなかったナルレイシアだった。

（あの分だと、きっと戻るなりあれこれ尋いてらっしゃるに違いないわ）

それを想像すると胸が重くなるが、まさか本当のことは言えない。

止められるに決まっている。下手をすれば、自分も協力するとか言い出しかねない。そんなことは断じて認められない以上、ことが片づくまでに、そちらの対処法も考えておくべきだろう。

「……本は、万一部屋を荒らされたりした場合、乱暴に扱われる可能性が高いから置

いていくとして……」

ファティ・リンシャには言っていないが、これからナルレイシアが向かうのは、スカルトードの屋敷などではない。

聞いたところ、やはり上流階級に属するらしい彼の屋敷は、かなり警備も厳重だという話だったからだ。やはり餌――囮と言い換えてもいいが――である以上、多少の手の出しやすさは必要に思われる。

では、ということで選ばれたのが、ロスタロイド到着間もなく、昏倒した彼女を介抱してくれたあの女性の家だった。

正確に言えば、彼女の経営する食堂兼宿屋の一室を借りるのだ。

「えーっと、石鹸でしょ、ドレスは数日分あればいいとして……あれ？」

鞄のなかにつめこんでいたナルレイシアは、覚えのない感触に首をかしげた。

「なんだっけ、こんなもの入れた覚えは……」

小さな革の袋には、しかし見覚えのある字体の刺繍がほどこされており、彼女はそれを忍ばせた相手を知った。

「お母さんったら……心配性なんだから」

チャラチャラという音から察するに、硬貨のたぐいだろう――万一財布を紛失した場合に備えてといったところだろうか。

（それにしても、助かったわ。部屋代のこと考えると、ちょっと不安だったもの……お母さんありがとう）

しみじみと母の愛を噛みしめるナルレイシアであった。

が、それは少しばかり早すぎたようだ。巾着状の袋の口を開けてみた彼女は、がっくりと肩を落としてしまった。

確かに硬貨は入っていた……入ってはいたのだが、それはあまり実用的ではない神聖硬貨と呼ばれるものだったのだ。虹神各神殿が発行するこの硬貨は、どちらかというとお守りとしての意味合いが強い。

一般ではあまり見かけない上に、信心深い人間に用いようとすれば、罰当たりと怒られること請け合いの品なのだ。

（お母さーん、もしかしてこれは無駄遣い防止措置なの？）

母の意図を量りかね、嘆息したナルレイシアは、袋のなかに硬貨以外の物が紛れ込んでいることに気がついた。

取り出して見て、首をかしげる。

「なに、これ……？　指輪……だろうけど……」

見覚えが全くない上に、サイズからしてどう見ても男性用の、幅広の指輪。

凝った細工がほどこしてあるわけでもなく、ところどころ黒ずんでいるのをみると、金色ではあってもメッキかなにかと思われる。換金しても大した額になるとは思えぬものだった。

（父さまのもの……でもないよねえ。もしかして、見すぼらしいけど実は霊験あらかたな……とか？　よく見れば小さいけど黄水晶嵌めこんであるし。旅の無事を約束するお守りってところかしらん？）

ディエーン王国に御座の柱神は黄の属である。

当然、七虹神中、黄神への信仰が最も強い。黄色い石はその黄神の加護の力を宿すと考えられているから、お守りとして用いられることも多いのだ。

（まあ、ばたばたしてたし、新調する暇なんかなかっただろうからなー。でも、母さん、なにもここまでお守りばっかり揃えなくても……）

そこまで自分は頼りなく思われているのだろうか――自問した彼女は、否定できない過去のあれこれ及び、現在のあまり穏やかではない状況を思い出す羽目に陥り、少し落ち込んだ。

不幸中にも幸いがある分、まだましではあるものの、どうせなら悪運とは無縁の身に生まれたかったなと、心から思ったナルレイシアだった。

「おう姉ちゃん。こいつがハーションの白葡萄酒、で、こっちがウォンダの麦酒。どっちも買いたいとこなんだが、なんせ懐事情が厳しくってよ」

テーブルの上に並べられたふたつのグラスには、白葡萄酒と麦酒が満たされていた。

（わたしは棒倒しの棒かっての……）

憤懣やるかたない思いを噛みしめながら、ナルレイシアはそれぞれのグラスに一口ずつ口をつける。

食堂の片隅のテーブル――そしてナルレイシアの正面に座る居酒屋の主人である中年にさしかかり、いささか腹部に余分な肉がつきかけた男性が、真剣に問いかける。

「で、どっちだと思う？」

（お酒の味がわかるほど呑んだことなんてないわよ）

とは思ったものの、実物に触れなければ判定できないと言った手前、彼女は考える素振りで目を閉じた。

実を言うなら、考えるまでもなかった。美味しく感じるか否かではなく、どちらにぴぴっと感じたのかが重要なのだから。

今回ぴぴっと感じたのは、白葡萄酒のほうだった。

だから、正直に答えたのだ。

「ハーションの白葡萄酒」

と。

聞くなり男が立ち上がった。

「そうか！　じゃあ、ウォンダの麦酒を仕入れりゃ間違いないってことなんだな!?　やー、助かった！　ほんじゃ、これ約束の代金な！」

財布から取り出した、料金より多少多めの硬貨をテーブルに置くなり、男は踊りかねない足どりで店の出口に向かった。

「次第によっちゃ、首くくらにゃならんかと思ってたが……やほほーい！　逆の占者さまさまだぜいっっ！」

浮かれた男の声に、がっくりと肩を落とすナルレイシアの内なる心を理解してくれる存在はここにはいない。

必死、と顔に書いた次の客が、彼女のテーブルの正面に新たに着くだけだ。

（誰が逆の占者なのよ――――っっっっ！）

喚いて八つ当たりする気満々なれど、事態の早期解決を望む彼女にそれは許されていなかった。

この店……『踊る赤馬亭』――非常に縁起の悪い名前だが――の二階に部屋を借りるなり、家主である女性……ランディータにつきつけられた残酷な事実が忘れられない。

「手っとり早くまずい事態を片づけたいんなら、噂の的になるのが一番の近道だね。見たところあんたはものすごい悪運の持ち主だろう!?　だったらそれを利用するだけのしたたかさを持たなきゃね。悪運呼び寄せるってことは、逆の意味でいや、別のみち選べば幸運招き寄せるってことになるんだからね」

そうしてつけられたのが『逆の占者』の悪名である。

「はったり、はったり」

「そうですよ、大半は面白がりの客ばかりです。間違っても人生かけた依頼主なんて来やしませんって」

それもそうかと思って乗せられたのが間違いだったのか……それともランディータとスカルトードの宣伝による『逆の占者』の評判が大きすぎたのか……。

開店三日目にも拘わらず、ランディータの店におけるナルレイシアの状況は――盛

況の一言につきる。

その理由はといえば、ナルレイシアの答えが常に『正解の逆』だったことだ。

（百発百中ならともかく、百発逆百中なんて、やだ）

心からそう思っているにも拘わらず、彼女の店は繁盛する一方。

（こんな信用なんて、いらない！）

それはナルレイシアの心からの叫びだったが……神々が受け入れたかどうかは……謎のままである。

（第一、こんな悪名ばっかり轟かせて――――っっっ！　一体なんになるというのよ!?）

似非占い師の仮面を被ったナルレイシアは、仕方なしに役目を果たすための笑みを顔にはりつけ、行列のできた客たちに応じる。

けれど、獲物が食いついてくるまでの我慢、我慢、我慢。

呪文のように唱えつづけ、忍の一字で耐え忍んできた心は、求める相手を見いだした瞬間。

瞬間――。

全身の血が沸騰しそうな錯覚を覚えた。

「失せ物探しを頼みたい」

そう告げる男に、彼女はにっこり笑ってうなずいた。

「なにを、お探しですか？」

客は無表情に言い切った。

「資格を見定めるための楔を」

「資格とは？」

「それをお前が問うとは、それこそがおかしい」

おかしくとも、なんであろうと、それこそを聞きたいと思っていた彼女は肩すかしを食らうことになった。

謎はまだ、解けぬままである。

6

「いよいよ敵さんのお出ましってわけだ」

閉店後、二階の空き室での打ち合わせ中――ランディータはなにやら楽しそうにそう言った。

「それで、その男は確かにあなたを襲った曲者に間違いないのですか？」

尋ねてきたスカルトードに、ナルレイシアはこくりとうなずいた。

襲われた被害者の目撃証言というものは、実は意外にも信用ならないことが多い。恐慌状態に陥った人間は、たやすく記憶のすり替えを起こしてしまうからだ。

たとえば、強盗に襲われ助かった人間は、そのとき感じた恐怖ゆえに、記憶を改竄する。

あれほどに恐ろしい思いを味わわされた相手なのだから、凶悪な顔つきであったに違いない。もう少しで殺されそうだったのだから、ものすごく大柄だったに違いない。

それをもとに作成された似顔絵は、大抵が凶悪無比な面相の、巌のような屈強且つ大柄な男のものとなる。後に捕まった真犯人が、実はまったく似ていないことも珍しくはない。

が。

こと、ナルレイシアに関しては、これは当てはまらない。

自他とも認める『不幸中の幸いの権化』である彼女は、それこそ『不幸中の幸い』にも、修羅場慣れしているのだ。

焦らず、気をしっかりと持ち、即座に冷静に事態を判断する癖が、好むと好まざるとに拘わらず、しっかり身についてしまっているわけだ。

だから、彼女に限っては、襲撃者の顔を歪めて記憶することはなかった。

……本人にとっては、あまりありがたい特技でもなかったが。

「資格を見定めるための楔……かぁ」

あの男が返せと言ったものは、恐らくそれに違いない。

とはいえ、表現が曖昧すぎて、なにがなにやらわからない。

「資格、資格ねえ……例えば神官の耳飾りみたいなもの、とか？」

首をかしげながら、ランディータがつぶやく。

「確か、神殿ごとに石が違うんですよね。あと、台の地金も位階によって違うって聞きました。フィレアは田舎だから、神官さまの耳飾りって、銀のものまでしか見たことないんですけど。最高位の神官さまは金の耳飾りをつけてらっしゃるんですよね」

「資格の証というのなら、司法官の首飾りも似たようなものかな？　もちろんご婦人の装飾品と違ってシンプルこの上ない意匠だけどね」

ナルレイシアの言葉につづけるように、スカルトードが口にする。

（耳飾りに首飾り、かぁ……うーん、やっぱり心当たりないな）

それに……だ。

「もしかして、その資格を示すなにかって、盗まれたんでしょうか？　だったら返せ

っていうのもわかるんですけど……あ！　誓って言いますけど、わたし、そんなことはしてませんからね！」

慌てて手を振ったナルレイシアに、ランディータとスカルトードのふたりは、わかっているとばかりにうなずいた。

「そんな子じゃないのは見ればわかるってば」

「そうですよ。あなたは被害者になることはあっても、加害者になるようなひとじゃありません。ですが……そうですね、それが盗まれたものだとしたら……そうして、それをあなたに返せと迫るのであれば、もしかしたらあの男こそが盗人なのかもしれません」

口々に否定され、ほっとするのも束の間、ナルレイシアは再び首をかしげた。

「……でも、返せと言われても、わたし別に拾い物なんかした覚えはありませんし……あれから入念に荷物改めましたけど、特に怪しげなものなんか見つかりませんでしたよ？　まあ、母が内緒で入れてくれてた神聖硬貨はありましたけど……」

いくら『神聖』と名がついていても、貨幣を資格証明に用いる組織は聞いたことが

ない。

「神聖硬貨ねえ……それってやっぱりあんたのお守りに？」

ナルレイシアの不幸伝説をすでに知るランディータの言葉は、悪意がないことがわかっていても、なかなか鋭く胸を抉ってくれる。

「……多分。本当に困った時には換金できるように、小額硬貨もまぜておくって書き付けも一緒に入ってましたから。ただ、お守りにしても、あんなにいっぱい入れることはないと思うんですよね」

思わずため息が出る。

「それは……母君の親心というものでは……？」

スカルトードの声にも表情にも、おかしな点はなかったが、心なし目線が宙を泳いでいるように見えた。

過保護と思われているのか、あるいは無理もないと思われているのか……まだしも前者であってほしいところだが、フィレアからの不幸続きを知られている相手となれば、後者であってもおかしくはなかった。

「……かもしれませんけど、見たことない硬貨も結構混ざってるから、母には悪いけど、偽物もあるんじゃないかと思っているんです。普通、虹神さまの横顔が浮き彫りにされているでしょう？　なのに何枚かは正面顔のだったりするし……」

その瞬間である。

ランディータとスカルトードのふたりがふたりともに反応した。

「正面顔の彫りこまれた神聖硬貨……？」

思わずびくりと震えてしまった――それほどの迫力だったのだ。

「確かに!?」

先程までの陽気さが嘘のような、ランディータの見据えてくる視線に、つい身を退きながら、ナルレイシアはうなずいた。

「は、はい」

一方、スカルトードは、俯き、なにかを考えている様子だった。

（なんか、怖い……急にどうしちゃったんだろう？　もしかして、一般に出回ってるものとは別に、特別な意味のある神聖硬貨なんてものが存在してるとか……？　え、

とじゃあ、あの革袋の中身、実はお母さんが心遣いで入れてくれたものばかりじゃなくて、なにか混ぜ物があったとか……？　でも、いつのまにそんなこと……）

全くもって覚えがない。

である以上、ナルレイシアはなにか知っているらしい目の前のふたりに尋ねるしかなかったのだ。

「その……正面顔の硬貨って、もしかしてさっきの話と関連するようなもの、なんでしょうか……？」

「すると考えた方が話が通じやすいね」

ランディータがはっきりと言い切り。

「話だけで判断するのは危険でしょう」

なぜか、ぐったり疲れた様子でスカルトードがつづけた。

自分の発言のどの部分が、ここまでふたりに衝撃を与えたのかわからないナルレイシアは少々途方に暮れた後、思い切って尋ねることにした。

「……あの、持ってきましょうか？」

見てもらったほうが早いと思っての言葉に、ふたりは揃ってうなずいた。
「そうだね、百聞は一見にしかずという言葉もあることだし」
「ですね、彼女の疑惑通り偽造硬貨という線も消せませんしね」
ふたりがなぜ、こんなにも深刻な顔をしているのか、推測する材料すらないナルレイシアはそそくさと立ち上がった。
その、瞬間――。
ドォンッ、という大きな音が、小さくはない振動とともに響きわたった――！
呆然とする彼女の耳は、窓の外から聞こえてくる悲鳴と怒号のなかから、いくつかの言葉を拾い上げるのが精一杯だった。
「なんだ!?　突然、弾けたぞっ!?」
「おまけに火だ！　火が出やがった！　誰か火消し呼んで来い！　あと水だ、水！」
弾ける――そして、火。
「……まさか、火薬……？」
つぶやいたナルレイシアは気づかなかった――その言葉にランディータとスカルト

ードのふたりが、一瞬彼女を見る目に剣呑な光をたたえたことを。

正直、そんな余裕はなかったのだ。なぜなら『爆発』及び炎上した建物は、この建物の隣にあり、すぐにも避難しなければならない状況だったのだから。

ただし、この騒ぎが偶然だとか、例の『不幸中の幸い』の一環だとかは思わなかった。

爆発など、人為的意図なくして起こるはずのないことなのだから。

しかも時間は深夜に近い。

子供なら眠っていて当然の時刻だし、朝早い人間も就寝していておかしくはない頃合いだ。

（まさか、わたしを狙って、ここまで大がかりなことをしでかすだなんて……!?）

猛烈に腹が立った。

「避難しましょう。火事のほうも、お手伝いできることがあるんならやりたいし……」

だから、きっぱりと言い切り、ふたりとともに外に出た。

雲に覆われた夜空を、真紅の炎が染め上げていた。

「やられた……！」

火事騒ぎもどうにか落ち着き、なんとか無事だった『踊る赤馬亭』に戻ったナルレイシアは、仮住まいである部屋の惨状を目にするなり毒づいた。

ひどい……ありさまだったのだ。

引き出しのことごとくはひっくり返されており、寝台は見る影もなく破壊し尽くされている。故郷から持ってきた大型の鞄はふたつとも切り裂かれていたし、布団や枕は細切れ状態にされていた。

どう見ても、徹底的な家捜しがなされた後としか思えない。

（……ここまで、やる……）

ナルレイシアの胸に、ふつふつたる怒りが沸き上がる。

元々が短気なタチである彼女であったが、『短気は損気』をモットーに、忍耐をたたきこんでくれたのは故郷の母と恩師だった。

おかげでこれまでなんとか大禍なく過ごして来れたといっても過言ではない。いかに『不幸中の幸いの権化』と呼ばれようと、客観的に見て悪運続きの人生だとしても、それでもまだましだと言える程度の被害ですんだのは、ひとえに彼女の鍛え上げられた忍耐力の賜物であったのだ。

が、それが、ここでぷつんと切れた。

（この部屋あら探しするためだけに、あんな騒ぎを起こした……ですってぇえっ!?）

到底許せぬことだった。

（絶対！　見つけ出して叩きのめす！）

固く心に誓ったナルレイシアは、一緒に戻って来たランディータとスカルトードを振り返り、にっこりと微笑んだ。

「ここまでくると、相手の狙いはあの袋以外ないって感じですよね。今度こそ取って来ますから、中身、検分していただけます？」

十六歳の少女のものとは思えぬ、迫力たっぷりの笑顔に、ふたりは軽く目を瞠った。

「え、でも……」

「このありさまでは……」

とうに盗まれてしまったのでは――？

ふたりのそんな視線を前にして、ナルレイシアは自信たっぷりに言い切った。

「多分、大丈夫です」

その彼女の言葉通り、問題の革袋とその中身は、無事にその場所から見つかった。

ナルレイシアが選んだ隠し場所――それは店の裏手にある井戸の内壁だった。

ただしこれは、『この品を奪われてはまずい！』という直感ゆえのものではなく、あくまで『最後の頼みの綱だけは確保しておかなければ』という、保身第一の判断によるものだった。

「で、これなんですけど……」

わけのわかっていないナルレイシアは、ランディータとスカルトードの前で、巾着

の中身をぶちまけてみせた。

広げられたのは、数種類の神聖硬貨と……粗末な指輪。

金メッキの指輪をひょいと取り上げ、「ちょっと調べてもいいかな？」と、スカルトードが尋ねたときも、彼女はなんの不審も覚えなかった。

「それは……もちろん」

答えた彼女の反応に、安心したように微笑んだスカルトードが、懐から研磨布を取り出し、磨いて磨いて磨いてみるまで……本当になにも感じなかったしわからなかった。

ただしそれは、磨かれた指輪の真の姿を目にするまでのことだった。

スカルトードの手にかかったとたん、黒ずんだメッキ仕立てのものとしか見えなかった指輪は豹変した。

実際に見ていたナルレイシアでも、ちょっと信じられないぐらいの、劇的な変化だった。

研磨布の洗礼を受けたその指輪は、つやつやと輝いていた。

地金は金、そこに銀と銅の象嵌がほどこされ、中心に嵌められた小さな黄色い石は、輝きすらも違って見えた。

「うそ……！　あんなに貧相だったのに……!?」

信じられない、と声を上げたナルレイシアとは別に、ランディータとスカルトードが息をついた。

「うわー、最悪」

「絶対にあたってほしくない事ばかり的中したりするんですよね……」

ははは、と笑うスカルトードの笑いは、どことなく乾いていた。

そんなふたりから聞き出した、その指輪の意味を知ったとき、ナルレイシアは「冗談じゃないわよ！」と絶叫しそうになった。

悪運にもほどがある、と思った。

なぜなら、知らぬうちに荷物に紛れこんでいたその指輪が……その正体が。

あまりにも意外な……意外すぎる意味を持つものだったからである。

「嘘でしょう!?」

と、ナルレイシアは叫んだ。
けれど誰も、否定してはくれなかった。
その銘(めい)は「黄昏(たそがれ)の黄金」。
世界を支える柱神と共にある、伴身(はんしん)にも等しき装身具であった。
ただし、その銘を共にする柱神は、いまだ存在しない。

7

ロスタロイドに来て半月足らずだというのに、なぜ、こうも厄介事ばかりつづくのだろう――黄神神殿の一室で、ナルレイシアは深い息をついた。

（言いがかりをつけてきた曲者をとっ捕まえればそれでおしまいだったはずなのに……）

そもそものきっかけは、ロスタロイドに到着した夜の出来事だと、いまでは確信している。

酔漢とおぼしき男にぶつかられ、頭を打って昏倒した。それからスカルトードに発見、保護されるまでの間に、大切な本は三冊もなくなり、知らない荷物が増えていた――ファティ・リンシャの屋敷で本に夢中になっていたものだから、ずっと気づかず

にいたのだけれど。

（勝手にこちらの荷物に紛れこませたくせに、力ずくで「返せ」って言うだけでも、許しがたいと思ったものだけど……）

よもやまさか、その『品』とやらが、あんな大層なものだとは想像もつかなかった。

それは、柱神の証にして半身。

柱神を柱神たらしめる神具。

『黄昏の黄金』

しかも対である柱神は、いまだ存在しないときている。

それがなにを意味するのか、正確にはわからないが、かなり厄介な事態に自分が巻きこまれたらしいことだけは、不本意ながら理解できた。

なにしろ指輪を見るなり、スカルトードは血相を変え、ナルレイシアを黄神神殿に引っ張ってきてくれたのだから！

（ああ、どうなるんだろう、わたし？　柱神さまに関わるお宝を隠し持っていたって

ことで処罰とかされるのかしら……？　でもでも、知らないうちに荷物に紛れ込ませてあったんだから、わたしだけが責められるってことはないわよね？　そのあたりのことはスカルトードさんが説明して下さる約束だし……。ああ、でもなぜもっと早くに気づかなかったとかなんとか言われちゃったらどうしよう!?　迂闊なのは否定できないけど……でも、でもっ、あんな薄汚れた指輪が、そんなもんだなんて、一般庶民にわかるはずがないわよー！）

考えれば考えるだけ不安が大きくなっていく。

（大体、なんだってそんな恐ろしいものが市井に流出なんかしちゃってるわけよ!?　暗黒時代の後、これ以上神宝が損なわれることがないよう、厳重に保管されてるはずでしょうに）

暗黒時代、人間は虹神と柱神への畏敬の念を忘れ、我欲に溺れ、大罪を犯した――と伝えられている。

その罪がいかなるものであったのかは、いまでは不明となっている。再発を危惧した各神殿が真実を封じたのだという声もあるが、それもあくまで風聞にすぎない。

ただ、かつて人間が度し難いまでの愚行に踏み込んだのは事実である。というか、そうとしか考えられない。なぜなら百八つあった神宝の半数近くが歪められ、本来の役割を果たせぬようになってしまったからだ。

結果、歪められた神宝は新たな柱神を選ぶことなく、天と地の間――空を支えるものたちは六十そこそこに減ってしまった。

以来、神宝は柱神と神殿によって厳重に管理されるようになり、それを手にしようとする者は極刑に処せられてきた――はずなのだ。

なのになぜ、その神宝が外に出てしまったのか……なによりあの盗人が、なぜ神宝を狙ったのかがわからない。

盗み出して、それからどうするつもりだったのか。

(神殿相手に取り引きするつもりだったとか……？　そりゃあ世界滅亡に関わる一大事だもの、神殿だって多少の要求は受け入れるわよねえ)

実際、かの暗黒時代、あと五つも神宝が損なわれていたら、柱神たちがいかに力を尽くしても天を支えることは叶わなかったろう――という実に恐ろしい話を、ナルレ

イシアは恩師から聞いて知っていた。

因みに、恩師である老人の家の本棚に並んでいた書物の約三分の一は禁書とされているものだったことを、彼女は割合早い時期に気づいていた……が、黙っていたという前科を持っている。もちろんばれなければ罪にはならないことだから、彼女は生涯師匠の本棚の中身については黙秘しつづける覚悟である。

（ほんっと、厄介なことに巻き込まれちゃったな。きっと、事情聴取だとかであれこれしつこく尋ねられるんだわ）

鬱陶しい、鬱陶しい、鬱陶しいことこの上ない。

それでもことがことだから――まあ、多少のことには目を瞑ろう、と健気な決意をしたナルレイシアは、その一刻後、顎が外れるような衝撃に見舞われた。

黄神神殿最高位司祭の、実にきらびやかな衣装を纏った老人からの申し出に、彼女は……あろうことかなかろうことか「はあ？」と問い返してしまったのである。

黄神神殿最高位司祭――アラマンディを前に、ナルレイシアは呆然と目を見開いた。

後にこのときのことを思い返す度、赤面することになるのだが――それでも不幸中の幸いにも、口をぽかんと開ける醜態だけはさらさずにすんだ――彼女はいま耳にした言葉が理解できなかったのだ。

「し、失礼ですが……もう一度おっしゃっていただけますか？」

聞き違いに違いないとの思いで、ようやくそう口にした彼女に、アラマンディは気を悪くした様子もなく、厳粛な面持ちで……やはり間違いとしか思えないことを告げてくれた。

「ナルレイシア殿には、斎王院に入っていただきたい」

「さいおういん……」

耳に馴染みのない言葉に、ついおうむ返しにつぶやいてしまう。

「申し訳ございませんが……その、斎王院とは……？」

「斎王さまがたが住んでおられる王宮の一郭のことです」
親切に説明してくれるのはありがたいが、ちっともわからないのは一緒だった。
（だから、斎王がなんなのかが、そもそもわからないんだけど……）
「ええっと……」
困惑する彼女の様子に気づいたのだろう、同席しているスカルトードが補足してくれた。
「次代柱神の候補に選ばれた方々を、斎王とお呼びするんですよ」
（スカルトードさん、ありがとう！）
心から感謝したナルレイシアはしかし、その意味を理解した瞬間、絶叫した。
「次代柱神さまの候補ですって!?　柱神さまは生まれながらに柱神さまじゃないんですか!?」
物の本には確かにそう書いてあった。
もちろん、書物に記されていることがすべて真実であるとは限らない。殊に歴史が絡んだ場合、省略や歪曲、見解の違いによるさまざまな解釈は珍しくない。

知ってはいた……知ってはいたが……。

（ちょっと待ってよ！　柱神といったら柱神でしょう!?　世界の天と地の間の空間を支える柱たる方々で……神様で……）

その神様に候補がいるとは――いったいどういうことなのか？

（あ、そうか……神宝に選ばれた方が柱神さまになるわけよね。あ、でも選ばれなかった方々はどうなるのかしらん？　神に準じる方々のはずだから、きっとなにがしかの力とか持ってらっしゃる……わよね。目立たないようにひとに混じって暮らすとか……？　それとも能力を封じられたりするとか……？）

いままで信じていた世界が崩壊したような衝撃のなかにあるナルレイシアは、混乱しまくっている彼女の姿に、スカルトードが「変だな」とつぶやいたことにも気づかなかった。

そんな彼女の意識を現実に引き戻したのは、困惑気味なアラマンディの声だった。

「失礼だが、ナルレイシア殿はファティ・リンシャから、なにもお聞き及びではない？」

なぜここでファティ・リンシャの名前が出てくるのか、わからなかったが、実際彼女はなにも聞いていなかったのでこくりとうなずいた。
アラマンディの表情が厳しいものへと変化した。
「どういうことだ？」
険しい目線は、真っ直ぐにスカルトードに向けられる。
「……と、言われましても」
答える青年も困った顔だった。
「あの方のお側近くにいるからこそ、このような前例なしのことも認めようということになったのだぞ？　それが、なにも知らぬ小娘とあっては――」
かなり動揺していたのだろう――神職にある、しかも最高位にある人物が、当人を前にして小娘などと口走ったのだから。
だがしかし、それがわかったところで、小娘呼ばわりされた当人の感情が宥められるわけではない。
ロスタロイドに着いて以来……というか、ここ数日というもの、不幸と不運と災難

の連続で、この事態のどこに『幸い』があるのかと思っていた少女は、かーなーりー気分を害していた。

あのはた迷惑な賊に関しては、確かにこの手でとっ捕まえて、盛大に文句をぶちまけてやりたいところだが、だからといって、なぜ聞いたこともない場所に行かなければならないというのか。しかも言い出した当人が、いまになって渋っているときた。

つきあう義理はない。

そもそも柱神だの神宝だの——一般庶民の手には余る。

ここは……少々主義には反するが、『勇気ある撤退』とやらを選択するのが賢く思えた。

なんというか……下手したら『なけなしの幸い』すら手に入らないような、そんな不吉な予感もしていた。

この件はやばい。逃げたほうがいい。

心のどこかから、そんな声が聞こえていた。

だから——そうしようと思った矢先のことだったのだ。

『助けて』

という声が聞こえたのは。

（え、なに!?　誰!?）

声のした方に目を向けて、ナルレイシアは二度驚いた。

なぜなら、応接室の豪華な長椅子に腰を下ろした彼女の膝に、すがりつく――どう見ても実体ではない半透明の体の子供がいたからだ。

肩に届くかどうかという長さで、綺麗に髪を切り揃えられた子供の性別はわからない。

見覚えはなかった。

ただ、とても気になる子供だと、思った――。

「……カール」

屋敷の主に声をかけられ、黒髪の青年は不本意ながら顔をあげた。
目に入ってくるのは、穏やかな三十代半ばに見える男性の笑顔だ。
優しげで慈悲深げで善良そうな――。
「聞き届けてはもらえないかい？」
尋ねられ、諦めたように青年は息をついた。
「とんでもありません」
不承不承の言葉だと、わからぬはずもなかろうに、それを聞いた男性は、心底嬉しそうに微笑んだ。
「では、引き受けてもらえるんだね？」
「……」
答えが返るまでに多少の間が生じたのは、青年――ガスカールの内面の問題だった。
「……はい」
実に不機嫌な面持ちで、ようやくうなずいた彼に、そのひとは晴々とした笑顔で、

嬉しそうにこう告げた。

「ありがとう！　君ならきっと、そう言ってくれると思っていたよ！」

翌日彼は、黄神神殿を訪れ、不本意な相手の警護を受け持つこととなった。

ディエーン王国の繁栄を陰ながら支える柱神の、次代を見極める『選定者』の守り手として。

選定者の名はナルレイシア。

十六歳の経験不足の……小娘だった。

終末都市の灰色天使

『紅の蓮』の年

――人が生まれおちた瞬間に、逃れがたい宿命として『死』の枷をはめられるように、都市や文明もまた、誕生と同時に、滅亡への秒読みを開始する。

そう、始められた予言書があった。

世界最大の都市リィジャスについて、予言書にはこう記されていた。

――二十回めの『紅の蓮』の年、リィジャスには破滅の翼持つ美しき鳥が空を舞い、かの街には死が訪れよう……

と。

人々は恐怖した。二十回めの『紅』の巡りが訪れると、リィジャスを捨てて、他の都市に移り住む者も出始めた。それでも多すぎる財産に縛られた者や、移り住むほど

の家財を持たぬ者たちは、変わらずそこに住み続け、そうして、ついに『紅の蓮』の年を迎えた……。

けれど。

リィジャスに、予言に記されたような鳥は舞わなかった。破滅は訪れず、無事に『紅の木蓮』の年を迎えた時、人々は予言に乗せられた自分たちの他愛なさに苦笑しながら、一度は逃れたリィジャスに戻ってきた。

変わることのない平和な日々。リィジャスはますます発展し、やがて世界中が、この街を『翳ることなき都市』と呼ぶようになったのだ。

それでも、その呼称が必ずしも正しいものではないのだ、と知る者は、いた。ほんのわずかではあったけれど、リィジャスに落ちた影を、認める人間はいたのだ。

つまり、『光使』と『闇使』。

その背に大きな翼を持つ、人間ならざる存在が、いつのまにか、リィジャスの空に舞うようになったことを、勘の鋭い人間のいくらかは、感じることができたのだ。

白い翼を持つ光使と黒い翼を持つ闇使——彼らが死期の近い人間の元を訪れ、魂を

運んでしまうことは、いつのまにか公然の秘密になった。

誰もが不安だったから……肉体の消滅した後、自分がどこに行くのか、誰もが知りたいと思うと同時に、自分の犯した罪のために、苦痛の世界への旅を恐怖していたから。

膨れ上がっていく都市リィジャス。少しずつ数を増やしていく光使と闇使――。生気と賑わいの代わりに、倦怠と退廃が都市を支配していくのを、人は止めることができなかった。

そうして――。

二十回めの『朱鷺の蓮』の年……一つの運命の岐路が世界を迎えようとしていた。

破滅の危機を過ぎたことと信じている者が殆どで、その果てに何が待っているのかも、人々は知らない。それどころか、運命を握る人間でさえ、何も知らない状況で、けれど運命は人間に選択を迫っていた……。

最低の出会い

「羅智！　見損なったぞ！」

リィジャス最高の賢者と噂される羅智の屋敷に踏み込むなり、命は大声で怒鳴った。

玄関先のことだ。物静かに使用人たちは、何事かと怯えた視線を命に向けている。それはそうだ。リィジャスの支配者の後継ぎが、鼻息も荒くやって来て、突然屋敷の主人を罵倒したのだから。

「聞こえてるんだろう!?　出て来い。説明しないと、俺は金輪際お前と口はきかないからな！」

命は十六。体格はもう、立派に大人のものである。が、こんな時、口にする子供っ

ぽさの残る言葉が、容姿、家柄、頭脳ともに恵まれた次代の支配者である彼を、リィジャスの民が敬遠しない最大の原因となっていることに、彼は気付いていない。

子供が殆ど生まれなくなったリィジャスで、彼のこの子供っぽさが、人々に安らぎを与えるのだ。もっとも、本人はそんなことを認めるくらいなら、舌を噛む方を選ぶような気性なのだが。

「また、ずいぶんとわたしはお前のご機嫌を損ねてしまったようだな。よかったら、その理由というやつを、教えてくれないか？　でないと、わたしとしても説明のしようがないので」

奥の部屋から、灰色の長衣をまとった白髪の青年が出て来た。

羅智、だった。命の三倍以上は——わかっているだけでも——生きているはずなのに、外見は二十歳前後にしか見えない、というリィジャスの智恵袋……。

生まれた時から、命を育ててくれたのは両親でもなければ、乳母でもなく、この白髪の青年だった。十五になって、宮廷に住むようになるまで、命はずっとこの屋敷で育ってきたのだ。

「しらばくれないでくれ。俺は、政略結婚なんて、ごめんだって、ずっとあんたに話していたじゃないか！　なのに、突然婚約者なんて……絶対にごめんだ！　いくらあんたの決めたことでも、俺はいやだからな！」

顔を真っ赤にして、命は言った。

今日の午後になって、命は父親に突然婚約者の存在を告げられたのだ。見たことのない、けれど名前だけは知っていた有力貴族の娘を、彼の婚約者に推したのは、羅智だと言われ、彼はすぐにここに怒鳴り込んできたのだ。

「炎夏はいい子だよ。それに、何も絶対に結婚しろ、と言ってるわけじゃない。お前のお父上に、命にふさわしい娘はいないか、と問われたから、わたしは彼女の名をあげたのだ」

聞きわけの悪い子供にでも言い聞かせるような、穏やかな口調でそう言うと、羅智は命の肩を叩いた。

「だから、そんな風に怒るものではない。十六にもなって、お前は少しも変わらないな」

からかうような響きを感じとって、命は顔をしかめた。乱暴に羅智の手を払うと、彼は養い親の顔をきっ、と睨みつけた。

「俺が怒ってるのは、なんで炎夏なのか、ってこと！　あの子の噂を、あんたが知らないわけないだろう!?　いくら家柄がいいからって、闇使憑きと結婚する気になんか、俺はならないぞ！」

「噂は噂だよ、命。そんな中傷に惑わされるなんて、お前らしくないね」

あくまで穏やかな羅智の言葉。命が何を言いたがっているのか、知っているくせに、そんなことを言う羅智が、彼は憎らしくてたまらなかった。

闇使を、命は過去一度だけ見たことがある。あれは九歳の時――病床に伏した母の枕元、闇色の翼を持つ青年の姿のモノが、愛しそうに彼女を見つめていた。初めて恋する少女のように、母は頬を染めていたっけ……。

そうして彼女は間もなく死んでしまった。いまわの際、宙に伸ばされた手を、闇使が微笑みながら取ったのを、命は見た。愛して、愛して……でも母は、闇使を選んだ。もう、あんな風に裏切られるのはいやだった。

闇使憑き、なんて……闇使に魅入られた少女を、いつ攫われるかと心配しながら、愛していくなど我慢できない。

「何と言われたって、俺は炎夏と結婚なんて、絶対にいやだからね！」

そう、言い切った命に、羅智は仕方ないな、というような笑顔で答えた。

「もちろん、無理強いはしないよ、命。けれど、会いもせずに断るのはやめた方がいい。運命はどこに出会いを用意しているかわからないのだからね」

「人の手によって用意された出会いなんか、俺は信じない。あんたが何を考えているかは知らないけれど、俺は自分で勝手にやるからね……生涯の伴侶くらい、自分で見つける」

そう言うと、命はくるりと踵を返した。

子供のいない街、沈みこんだ人々の表情――そんなものばかり見てきた、ずっと。闇使に魅入られた母が死んで以来、命は心に決めていたのだ。恋するなら、絶対に闇使に心奪われることのない、生き生きした娘がいい、と。

死の使いである闇使に憑かれている娘なんて、絶対にごめんだった。

「帰るのかい？」

背後から、羅智の面白がるような声がかかった。

答えずに、ずんずん玄関に向かって歩く。

その時、背後から、羅智のものではない、別の声が聞こえたのだ。

「聞かせていただきました」

少女のものだった。

思いもかけない第三の声に、命ははっとして振り返った。

長い、長い漆黒の髪。きらきら輝く黒い瞳。肌は白磁……初めて見る少女だった。

美人というやつではないのだが、その瞳に浮かぶ強い意志の光が、印象的な娘……。

一瞬、息をするのも忘れて、命は彼女に見惚れた。こんなに、生命の力に溢れた少女を、彼はこれまで見たことがなかった。

誰だ……？

尋ねるように、命は羅智に目を向けた。白髪の賢者は、しかしおかしそうに目を細めるばかりだった。

その間にも、少女はつかつかと彼に向かって歩いて来る。近づけば近づくほど、彼女を包む光ははっきりしてきて、実際眩しいわけでもないのに、命は知らず目を細めてしまった。

少女はすぐ近くまで来ると、命に向かってにっこりと微笑んだ。そうして――。

突然の平手打ち……。

わけがわからなくて、命は茫然と赤くなった頬を押さえた。あまりに意外なりゆきに、怒ることさえ彼は忘れていた。

「命様のお心はわかりましたわ。意見の一致を見て、嬉しゅうございます……が、自分の陰口を笑って聞いていられるほど、わたしは人間ができておりませんの」

にっこり笑顔はそのままに、彼女はくるりと羅智を振り返り、軽く会釈した。

「ふたりとも、この婚約を嫌っていることがはっきりしました以上、無理強いはなさいませんよね、羅智様。突然お邪魔して、申し訳ございませんでした」

それだけ言って、彼女は出て行った。

扉を開けた彼女の背に、灰色の翼を見たように、命は思った……。

「あれ、誰？」

感情の欠けた声で尋ねると、羅智が苦笑まじりに答えた。

「君の言うところの闇使憑きの姫君だよ」

命と炎夏の、それが最低な出会いだったのである……。

忘れられぬ想い

どうしよう……自己嫌悪にどっぷりつかって、命は心臓の上を押さえる。

どきどき、どきどき。心臓の音が、最近どうも速くなっているような気がする。それも決まって、羅智の屋敷で会った、あの少女のことを考える時に限って、である。

怒りに輝くあの瞳が、自分を捕まえてしまったのだ、と命は思う。あんな目をする娘を、彼はこれまで見たことがなかった。あんな目をする娘を、彼はずっと探していたのだ。けれど、出会った瞬間に、嫌われてしまった……せめてひと目会うまで、羅智のところに怒鳴りこむ、なんて真似は控えるべきだった、としみじみ命は思う。もう、遅かったけれど……。

「いくらなんでも、もう駄目だよなぁ。婚約解消、向こうもしたがっていたし……」

ため息まじりにつぶやいて、命は頬杖をつく。

気分を変えようと、街に出てきたというのに、結局炎夏のことを考えてしまう。たった一度、それも最悪の出会い方をしたというのに、心を彼女に盗まれてしまったのだ。

すでに顔なじみになっている店の主人に、飲み物を注文して、彼は再び頬杖をついた。

知らず、ため息が出てくる。困ったものだ、と命は思った。

「何を考えこんでらっしゃるの？」

声が聞こえたのはその瞬間。

忘れようとしても忘れられないその声に、命は反射的に振り返った。

長い黒髪を一つにまとめ、町娘の着る身軽な服をまとった炎夏がそこにいた。

何という幸運……命は素早く立ち上がり、自分の向かいの椅子を引いた。

「この間は、すまなかった。ずっと、謝りたくて……会いたいと思っていたんだ」

本当は、ただ会いたかっただけなのだが、その前にやはり謝らなくては、と思い、

そう言う。

「もし許してくれるなら、何か奢らせてくれないかな？」

内心の緊張を隠して、命は言った。心臓の鼓動が、炎夏に聞こえるのではないか、と心配しながら。

炎夏は考えこむように、小首をかしげた。その背後に、灰色の翼を持つ何かが見えた気がして、命は目をごしごしとこすった。

「変わった人ね、ご馳走してくれると言うのなら、ありがたく同席させていただくけど」

呆れたようにそう言うと、炎夏はちょこん、と彼の引いた椅子に座った。

嬉しさと一緒に、不安が心に染みこんでくる。恋するのは初めてで、どうしていいか、命にはわからなかったから。好きな少女に、どう接していいのか、羅智はひと言も教えてくれなかったのだ……。

☆

無防備だな、と隣を歩く炎夏を見ながら、命は思った。

初対面の際の自分の無礼を詫びた後、命と炎夏は街で会うたび——もちろん、ふたりとも珍しくもないお忍びの途中、なのだが——よく連れ立って歩くようになったのだが、今日かち合った店は、これまでの場所とはちょっと危険の度合いが違う地区にあって、命は今、彼女の護衛を気取っているのだ。

そこは、リィジャスの下町にあたる地区で、スリや追いはぎには事欠かない危険な場所だった。命はけっこう昔から、お忍びと称していろいろな場所に足を運んでいたから、どこでどんな風に用心すれば、無事にすむか、わかっているけれど、炎夏の態度は、緊張感のかけらもなくて、何となく命は不安を覚えた。

「こういう場所、来るのは初めて？」

そうなら、二度と来ないようにさせなければ。固い決心を胸に、命は尋ねた——彼

女がうなずくことを信じて疑いもせず。

だが、驚いたことに、炎夏は首を横に振ったのだ。

「けっこうちょくちょく遊びに来るわ。時々、怖い男に声をかけられるけど、でも、気さくな人が多いので、好きなの」

聞いた瞬間、命はぞっとした。何と運のいい……いや、悪運が強いと言うべきか。街には、大小を問わず陰の部分が存在するものではあるが、リィジャスは世界最大の都市なのだ。犯罪も、尋常ではない……こんなに警戒心のかけらもない娘が歩いていて、無事にすむなんて、奇跡に等しい。

その思いが、顔に出たのか、彼を見つめる炎夏の瞳に、微笑が浮かんだ。

「信じられないって顔をしてる。でもねえ、本当に大丈夫なのよ。わたしには灰華がついているんですもの。絶対、守ってくれるの」

「灰華？」

首をかしげた命に、炎夏はいたずらっぽく笑って答えた。

「噂に高い、わたしに憑いている闇使よ。もっとも、闇使、ではないんだけどね。翼

が灰色なの……白じゃないから、光使でもないと思うけど」

彼が守ってくれるから、わたしは何の心配もいらないの。無邪気に、無邪気に炎夏はそう言って笑った――。

灰色の翼

物心(ものごころ)ついた時には、もう灰華(ハイカ)が自分を守ってくれていたの。だから、決して傷つくことはないのよ……。

少しだけ自慢げに、炎夏(エンカ)は言った。

命(メイ)は複雑な気分で、彼女の言葉を聞いていた。憑(つ)かれている、というのは正しくないことはわかった。光使でも闇使でもない灰色の者に、炎夏は愛され、守られているのだ。それこそ、彼女を傷つけるすべてのものから。

その結果、目の前の炎夏がいる。

生き生きとして、まっすぐな目をした無防備すぎる少女が。それは、とても魅力的ではあったけれど、どこか不自然な感じがした。

「つまらなくはない？」

思わず、命はそう尋ねていた。

かすり傷ひとつ、体にも心にも負うことなく、生きてきた炎夏に対する、それは素朴な疑問だった。

「なぜ？」

心底不思議そうな少女に、命は痛ましささえ覚えた。

痛みを知らない者に、他者の痛みを思いやることはできない。傷ついた経験から何かを学ぶことも……。

「だって、それは不自然だ。世界は刃でいっぱいだ。なのに、君は……君ひとりが隔離されて守られて。繭の中にしまいこまれた人生でしかないよ、それは。本当に生きていることにはならない……」

言いたくはなかった。破滅へと向かう世界……子供の姿が消えたリィジャス。そんな中で、傷つくことを恐れないなんて、しょせん無理な相談だ。誰だって願っている。傷つくことのない人生を歩めるものなら歩みたい、と。

けれど、目の前の炎夏に、そんなありえない夢の――夢でしかない生を歩かせたくはなかったのだ。こんなに生の輝きに溢れた少女を、偽りの繭の中に閉じ込めたくはなかった。

ぱしん、と命の頬が鳴ったのはその時だった。

炎夏は、真っ赤な顔で彼を睨みつけていた。

「何も知らないくせに、勝手なこと言わないで――」

怒りに肩を震わせる炎夏に、命は一瞬見惚れた――そのために、駆け出した炎夏を、追い掛けるのが遅れてしまったのだ。

「炎夏！」

大きな声で呼び掛ける。もちろん、炎夏は立ち止まったりしない。

「知らないのは、どっちだ！」

走り出して、命は小さく毒づいた。

傷つくことを知らない人間に問題があると、確かに命は思っていたけれど、でも炎夏にきついひと言を投げた原因が別にあることを、彼は知っていた。

何者からも、炎夏を守りたい……それは、命だって思っている。けれど、命はただの人間で、つきっきりでそばにいたって、そんなことは出来やしないのだ。それをやってのける灰華に、彼は嫉妬した……何よりも、誰よりも炎夏に信頼されている人間ならざる存在に、彼は嫉妬したのだ……。

その時――。

ふわり、と灰色の翼が、彼の行く手を阻んだ。他の人間は、気付かない、人ならざる存在が、命の前に立ちふさがった。

――話がある……。

肉声でない声が、命の頭に直接語りかける。皮肉まじりの挑戦的なその声に、命はこくんとうなずいた――。

☆

人気のない路地裏に入りこんで、命は炎夏を守る灰華と対峙した。ここなら、多少

『独り言』を声高に洩らしても、不審がられる心配はないから。

――お前は、わたしが炎夏を守るのが気に入らぬらしいな。

灰華が、からかうように言った。翼ばかりでなく、髪も瞳も灰色の彼を前に、少なからず心が竦むのを自覚しつつ、命は唇を噛んで答える。

「当たり前だ！　炎夏は人間なのに、人間の世界から隔離されているんだから。世界は確かにいいことばかりじゃないだろうけど、でも、お前が彼女をしまいこんでいる限り、彼女は本当に生きていることにはならない」

その奥に潜む命の嫉妬を見透かすように、灰華は笑う。

――そうかもしれない。だが、炎夏のあの生命の眩しい光は、世界中探したところで、他には見つからぬものだ。あの魂が絶望に染められて、死を望むようなことには、わたしはしたくないのだ。

それこそ、世界から生命の息吹が消えることになるのだから、と灰華は真面目に言った。

「俺だって、それは同じだ！　だけど、大切に隠すばかりじゃ、炎夏は生きているこ

とにならない！」

——綺麗事を言うな、お前は炎夏を独占したいのだ。だから、わたしが邪魔なのだ。わたしはお前の本音が聞きたい。お前が、真実炎夏を好きなのか、どうか。

痛烈な言葉だった。綺麗事で誤魔化すことを許さぬ厳しい声に、命はこぶしを握りしめ、そうしてふう、と息をついた。

「そうだよ！」

恥ずかしいまでの嫉妬を、命は言葉にした。

「これ以上はないというくらい、俺はお前に嫉妬してるさ！　ひと目で炎夏に恋したってのに……それ以来、ずっと彼女を守りたいと思ってきたのに、彼女は俺よりずっと、お前のことを信頼しているんだからな。お前に頼らなくたって、俺ひとりで彼女を守ることくらい、できる！　なのに、炎夏は、やっぱりお前が一番なんだ……」

相手が人間ならば、殺してでも炎夏の前から排除できる。だが、灰華は人ならざるもの。排除する術を命は知らず、また消してしまいたいと思う自分の浅ましさが、彼は嫌いだった。

――人間の魂は熱く激しいな……。

馬鹿にする響きは、その声になかった。懐かしむような、愛おしむような、不思議な優しさに満ちた声だった。

――お前は誓えるか？　炎夏を守る、と。あの無垢で輝かしい魂を、目茶苦茶に傷つけるすべてのものから守りきってみせる、と誓えるか、お前は？

「もちろん……もちろんだとも！」

命がそう断言した瞬間――。

少し離れた場所から、恐怖に満ちた悲鳴が上がった――。

まだ若い、少女のそれが、炎夏の発したものだと気付いた刹那、命は駆け出していた。

灰華の姿は、もうなかった――。

誓い

「炎夏（エンカ）！」

叫びながら、命は舗装（ほそう）の悪い路地を走る。

耳に残る魂の裂（さ）けるようなあの声だけを捜して。炎夏、炎夏！　心の中で、愛（いと）しい少女の名前を呼ぶ。どうか、無事で、と祈りながら……他には何も望まないから、と。

失いたくない……否（いな）、失えない！　死に行く都市でようやく見つけた、輝く瞳を持つ少女。

「炎夏！」

声の限り、命は叫んだ。こんな場所に、彼女を放っておいた自分を責めながら。

「炎夏！」

応えるように、つんざくような悲鳴が上がる。助けを求めるその声に向かって、命は走る。心臓など、破れてもかまわなかった……彼女を助けた後ならば。

走って、走って……命はようやく炎夏を見つけた。一見して追いはぎとわかるふたりの男に、汚い石壁に追い詰められていた。

「彼女から離れろ！」

腰から剣を抜き放ち、怒りに震える声で、命は言った。

そのくらいのことで、この地区の荒くれ男が従うなどとは、露思っていない。ただ、ふたりの注意は自分に向く……その隙に炎夏が逃げられればそれでいい、と彼は思った。

「ぶっそうな物を持って……」

男のひとりが嘲笑う。

「使い方も知らないくせに、そんなものを抜いちゃ、怪我のもとだよ、お坊ちゃん」

単なる威嚇だと、誤解するのは向こうの勝手。その誤解につきあう義理は命にはな

い。

固く剣を握って、彼は男のひとりに斬りかかった！　生命までは取らない……武器が持てぬよう、利き腕を傷つけるだけだ。

「こいつ！」

不意を襲われ、簡単に戦線離脱した仲間に舌打ちしつつ、もうひとりが油断のない構えで、命に向き直った。

じりじりと間合いを詰めてくる。

相手の武器は長めのナイフ――包丁と呼べるほどに大きな刀身は、食らえば腕の一本くらいは軽く切断されそうだ。

近づきすぎるのは、禁物。命は男の腕の長さまで計算に入れて、ぎりぎり届かない距離を保つ。体格では不利だが、その分、命には剣がある……男の隙を窺いながら、命は横に移動した。

張り詰めた空気に、耐えきれなくなったのか、男が唸り声を上げて、ナイフを振りかざした格好で命に襲いかかった！

ビュンッ、と刃が空を切る。紙一重の差でかわした命は、そのまま男の懐に入りこみ、剣を突き出す……腕が立ちすぎる相手に、遠慮などしていては、命に係わる。

肉を突いた、いやな感触に、命は知らず眉をひそめた。急所を突いてしまったらしい……外す余裕がなかった自分を、少し嫌悪した命は、しかしそんな素振りはちら、とも見せずに、腕をかかえて座りこんでいる男に目をやった。

「立ち去れ……殺しはしない」

冷ややかに告げると、蒼白な顔をした男は慌ただしくそこから消えた。

ふう、と息をついた瞬間……。

「命！」

逃げたとばかり思っていた少女が、泣きながら彼に抱きついてきた。

「命……命！」

なぜ逃げなかった、と言いかけて、やめた。小刻みに震える肩、嗚咽まじりの自分を呼ぶ声――こんな時、恋する少女を叱るなんて、命にはできなかった。

「炎夏……もう、大丈夫だから」

恐らく、初めて味わった恐怖に、全身を強張らせた少女に、命は優しく、優しくささやく。

「あなたが死んでしまったら……わたし、どうしようかと……」

すがりついてくる彼女の、切れ切れの声が、この上なく甘く、命の耳に響いた。

「本当は、もう、ずっと、あなたのこと見ていたの……好きだったの。でも、灰華が、守り手はひとりだって言って……わたしがあなたを選んだら、もう二度と自分は姿を見せないって……」

泣きじゃくる炎夏の、思いがけない告白に、命は夢ではないかと思った。

けれど。彼の腕の中の炎夏は現実で……彼は突然の幸福に、少女の体を力いっぱい抱き締めた。

「でも、さっき……襲われた時、わたし、あなたのこと、呼んでしまった……絶対守ってくれるってわかってる灰華じゃなくて。でも、すぐにあなたが来て、わたし後悔したの。あなたが、わたしのために死んでしまったら、どうしようって。そんなことになったらわたしは自分が許せなかった！」

「大丈夫だよ、炎夏。俺はきっと、君を守るから……君に、そんな心配させないくらい、強くなってみせるから……だから」

守らせてくれ……声になるかどうかの小さなささやきに、炎夏はこくん、とうなずいた。

幸福な命の心に、今はもう炎夏を守らない灰華が話しかける。

――幸せにするがいい。約束を違えた時は、彼女は遠慮なく奪わせてもらうぞ。

少し寂しげなその声に、命は声には出さずに応じた。

――もちろん、もちろんだとも！

灰華が何であったのか、命は知らない。

運命の扉がゆっくりと、今開いたことも、ふたりは知らぬまま、ただ固く抱き合った……。

運命の扉

ほんの少し前まで、滅び行く運命だった都市の外れの丘に、羅智（ラーチ）はひとり佇（たたず）んでいた。

その横には灰華（ハイカ）が、不機嫌な顔で宙に浮いている。

「なんとか、うまくいったらしいな」

満足そうに微笑（ほほえ）んで、羅智が言うと、灰華は憮然（ぶぜん）としてうなずいた。

「娘を奪われた気分だ……運命とは言え、わたしは面白くないぞ」

「仕方あるまい」

笑みを崩すことなく、羅智は腕を組んだ。

五十年ほど昔……二十回めの『紅蓮（くれないはす）』の年、何も起こらなかったと信じるのは、

現実しか見えぬ者たちだけだった。

賢者と呼ばれる人間は、気付いていた――未来への扉が閉じ、次なる時代が到来せぬことを。

光使と闇使は転生するべき次代を失った、死者の魂が姿を取ったものだったのだ。

人々は生気を失い、リィジャスの繁栄と裏腹に無気力になった。生の息吹が消えかけた世界に、新たなる生命が生まれるはずもなく、このままではやがて、人は滅びてしまうはずだった……そう、命と炎夏が出会い、惹かれ合わなければ。

生の力に溢れた、この世界にたったふたりきりの若者。あのふたりが結ばれることで、世界は次代への扉を開けることができたのだ。

本当の意味で、扉が開くのはもう少し後になろう。だが、その扉が閉まることは、もうあるまい、と羅智は思った。

誕生があれば死があるように、死があればその先には生がある。ふたりが開いたのは、まさに転生の扉――世界自体が、生まれ変わるのだ。

「扉も開いた……お前も行くがよかろう、灰華。光使と闇使の長を、長いことこき使

って悪かったな」

「何の。いい退屈しのぎであったさ。貴方のように、運命にこき使われているのと違い、わたしには期限がついておったしな……ほんに、貴方もご苦労なことだ。不老不死の代償に、世界をより良く歩ませて行かねばならぬのだから」

同情的な灰華の言葉に、羅智は苦笑してかぶりを振った。

「それは違う。運命を決めるのは人間だ。わたしはその手助けをするだけだよ。まあ、しかし、わたしに見える運命も、あと少しのようだ。予言書を記したり、いろいろと苦労したものだが、もうすぐお役ごめんになりそうで、なかなか嬉しいことだ」

「そんなものか？」

首をかしげる灰華に、羅智はにっこりと微笑んで答えた。

「そうとも。わたしはただの人間として、生きてみたいと、ずっと長いこと思ってきたのだからね」

運命の扉は開いた——世界は、転生を迎える……。

木蓮抄

「泣かないで……大丈夫。わたしは死にはしないから」

安心させるように、自分の肩を何度も撫でる白麟の優しさが、清蘭には何より悲しかった。

強くて、頼もしい白麟――この都シャーフの第一将軍で、元首にも覚えのめでたい勇者。そして、自分の恋人。来年の春には、婚礼をあげることが決まったばかりだというのに、この人は明日から東の蛮族を討伐するために、都を離れてしまうのだ。

涙が止まらない。勇猛なことで有名な蛮族を相手に、この人が怪我でもしたらどうしよう……そう思うと夜も眠れないというのに、優しい婚約者は嘆く自分を慰めることに一生懸命で、少しも自分のことに頓着しないのだ。

「死んでは嫌よ……絶対に、生きて帰って来て。貴方が死んだら、私は生きてなんかいられない」

胸にすがってようやくそうつぶやいた清蘭に、白麟はにっこり笑って約束した。

「大丈夫。わたしは幸運の女神の加護を受けているのだから。必ず、生きて戻るから……そう、あの庭の木蓮に、次に花が咲く頃には、ね」

でも白麟。幸運を司る女神は、同時に死をも司り、気に入った若者を自分の国へ連れて行くのだと言うわ。そんなに無邪気に言わないで――喉まで出かかった言葉は、さすがに不吉で、清蘭は口に出すことはしなかったけれど、やはり鉛を飲みこんだような重苦しい気分は、ずっと続いたのだ。

「木蓮の咲く頃には、ふたりの婚礼だよ」

一片の曇りもない笑顔で、白麟は約束して都を発った。

それ以来、清蘭の目は、庭に植えられた木蓮に吸い寄せられたように止まって動かなくなった。まだ、ようやく春が終わりかけたばかり……夏が来て秋と冬を過ぎなければ、春にはならない。木蓮は、一年ほども待たなければ咲きはしない――白麟は、戻って来ないのだ。

そう思うと、清蘭は胸が潰れるような気がして苦しかった。でも、と白い胸に手を当てて、彼女は思う。

でも、白麟はこれまで嘘をついたことのない人――きっとあの花が咲く頃には、帰って来てくれる。そうして自分達は幸せに暮らすのだ……。

けれど、だからと言って、時の流れが速くなるわけではない。木蓮が一番よく見える窓辺に座りこんで、清蘭は一日中、約束の時を待った。

夏が来る——眩しいほどの青い葉が、枝に茂るさまを見て、早く茶色に色づけばいいのに、と彼女は思った。

花嫁衣装を縫う手が、止まったきりなのに気づいて、彼女はこぶしで軽く頭を小突く。駄目だわ。白麟は帰って来るんですもの。来年の春までに、この衣装を仕上げなければ。帰って来たあの人は、私が心変わりしたのだと誤解してしまうわ。

日がな一日窓辺に座って、清蘭はせっせと婚礼衣装を縫い続けた。

秋が来る——それは落葉の季節。

そろそろ冷たくなってきた風に当たるたび、清蘭は白麟のことが心配でならなくなった。

こんなに風が冷たくなって……あの人は無事でいるかしら？　暖かい家も暖炉もなく、天幕で暮らしていると聞くわ。風邪などひかず、元気にしていてくれればいいのだけれど。

婚礼の衣装は、もうすぐ縫い終えるわ、白麟。そうしたら、今度は刺繍……春に咲く花々をふんだんに刺すわ。あなたが帰って来て、この衣装を見て感心してくれるように。

だから、きっと生きて帰って来てね。私は待っているから……だから。

そうして、またひとつの季節が過ぎる。

冬の木枯らしに、かじかむ指で刺繍を刺していた清蘭の元へ、白麟の訃報がもたらされたのは、黄昏が木蓮の梢の影を闇に溶けこませる時刻のことだったのだ。

「白麟将軍は、東の蛮族の奇襲にあった際、部下全員の無事を確かめ、いざご自分の脱出という時に……天幕に火矢が飛来したのでございます！」

傷だらけの体で、そう報告した兵士を前に、清蘭は耳を塞いだ。

「嘘よ！」

血を吐く思いで彼女は叫んだ。

「嘘よ！」

沈痛な面もちの両親や兵士に、清蘭は縫い上がった婚礼の衣装をさし出した。

「ほら。あとは刺繍だけなのよ？　春までには仕上げようと思って、私頑張ったんだから……なのに、春が来ても、あの人が帰らないなんて、そんなこと、あるはずないじゃない。白麟は約束したんだから。あの人は、約束を破ったことはないんだから！」

涙が頬をつたうのも気づかないまま、清蘭は衣装を抱きしめた。

どうして、誰もそうだと言ってくれないの？　白麟が死ぬなんて、どうして皆信じられるというの？

十日にわたる捜索でも、遺体を見つけることはできませんでした――。

新たな知らせにも、清蘭は頑なにかぶりを振り続けた。

「いいえ、いいえ！　あの人は死んではいない。死体が見つからないのは当たり前だわ……だって白麟は生きているんですもの。春になったら、ここへ戻って来るのですもの」

あくまでそう言い張る清蘭に、家族は必死に言った。

「ちゃんと現実は現実と認めなくてはいけないよ。考えてもごらん。白麟ほど優れた

武将は、この都にはいないのだから。きっとこの街を守って下さる女神様が、彼を手元に置きたく思われたのだよ」

「きっと、白麟も、お前の幸せを願っているに違いない。そんな風に閉じこもってはいけないわ」

「やめて、やめて！」

唇を噛みしめ、清蘭は純白の衣装を手に窓辺に座って言い放った。

「白麟は生きているの。私にはわかる……あの人が私を置いて死ぬはずがないもの。春には……だから、刺繍を刺さなくては」

泣きそうな顔で、必死に色とりどりの糸を刺していく清蘭の姿に、家族は何も言わなくなった。

もしかしたら、春まで好きにさせよう、と思ったのかもしれない。それでも彼女はかまわないと思った。春になれば、白麟と自分は婚礼を挙げるのだから——心底から、彼女は信じていたから。

庭の木蓮は、蕾をつけた。熱心に糸を選び、刺す傍ら、ふと顔を上げた清蘭は、そ

れを見る度に不安と期待に胸を締めつけられる思いを味わった。あの花が咲けば、そうすれば、白麟はきっと帰って来る……早く、早く咲いてちょうだい。でも、ああ……少しだけ怖い。

濃い紫の花が咲いた朝、清蘭は最後の模様を刺し終えた。さあ、出来たわ。白麟、早く帰って来て。もう、いつだって私はあなたの元へ嫁ぐ準備はできているのよ？

けれど、白麟は帰って来ない。

出来上がった婚礼の衣装を纏って、清蘭は窓辺で木蓮を見つめ続けた。一輪、また一輪と、花が咲いていく……あんなに待ち望んだ花なのに。

「ちっとも嬉しくないのは、あなたのせいよ、白麟」

泣きそうになるのをこらえて、清蘭は愚痴をこぼした——ここ一年、ずっとそうして来たように、庭の木蓮に向かって。

三着の晴れ着を一日ごとに着替え、洗い、そしてまた着て——そんな日が続く毎日。

母親が、窓辺に座りこんだまま、虚ろな目で木蓮を見つめる清蘭の肩を抱いてささ

やいた。

「かわいそうに。けれど、木蓮の花は咲いたわ。お前も、もう諦めなさい」

「いいえ……まだ、花は散っていないもの」

痩せて青白い顔に、精一杯の笑みを浮かべて清蘭は答える。笑い続けていなければ、笑顔を忘れてしまいそうだった。

木蓮は、花の時期は長いものの、それでも永遠ではない。

最後の一輪になった時、母親は清蘭にすがって泣いた。

「お願いだから、ここを離れておくれ。このままではお前は死んでしまう。いつまでも、待っていていいから、せめてちゃんと眠っておくれ！」

「死にやしないわ……私、約束したんですもの。白麟と、この春に結婚するって……」

力ない声が途中で消える……清蘭は目をみはった。この一年、見なかったことのない木蓮の木の下に、見たことのない存在が、あった。

「清蘭！」

母親が叫ぶのも、耳には入らなかった。彼女はただ必死に走った——待ち続けた恋人の元へ。

「白麟！」

すでに晴れ着の刺繍の糸は色褪せ、布地も以前のような艶はなくなっていた。

「白麟！」

それでも、帰ってきてくれたからいいのだ。

止まらない涙を拭いもせずに、清蘭は白麟の胸に飛びこんだ！

「何とか約束には間に合ったようだね」

肩から胸にかけて、包帯を巻いた彼は、病み上がりのように青白い顔をしていた。

「帰ってきてくれたのね……」

嗚咽まじりの清蘭の言葉に、白麟は優しく、優しく答えて、彼女を抱きしめた。

「言ったろう？　わたしは幸運の女神に愛されているんだって」

ほう、と息をつくように、最後の一輪が梢を離れたのはその瞬間のことだった——。

幸福の刻印

バラ色の瞳が、また色を薄くした。

きっともうすぐこの目はただのガラス玉になってしまうんだわ。

桶の水に映った自分の瞳を見ながら、彩眸は思った。バラ色の自分の瞳……昔は大好きだった色。でも今は少しだけこの目が嫌いだった。なぜって、この色が消えない限り、養父の奇尖が仕事を持って来るから。

『お前の瞳は、とても、とても珍しい色をしているんだ。それはお前の願いをなんでも叶えてくれる、力の証――大切におし。そして誰かの願いを聞いてあげるんだよ。そうすれば、お前は誰からも好かれる、何にも代えがたい幸福を手に入れることができるんだからね』

幼いころ、そう言ったのは父さんだった。人の願い事を叶えてあげられるってことは、とてもいいことなんだ、と思えた——あの頃は。きらきら輝く水晶のように、素晴らしいことなんだ、と信じていたっけ……。

でも、現実はちっとも綺麗じゃなかった。

願いを叶えてあげるってことは、少しも楽しいことではなかったのだ。楽しいどころか……。

ふう、と深く息をついて、彩眸は水に映った自分の目を指でつついた。今日に始まったことではないが、いつにも増して、今朝は気が重かった。

奇尖の昨夜の折檻で受けた背中のムチの傷もずきずき痛むし、またさんざん怒鳴られるのを思うと、体が縮む気がする。

「なんだって、お客の願いを聞いてやれないんだ！　お前はできるはずだろうが！　そのバラ色の目は飾りものか！」

どすのきいたあの低い声で怒鳴られると、心臓がぴくん、と跳ね上がるような気がする。

「なんのため、俺がお前を拾って食わせてきてやったと思ってるんだ。もっと真面目に仕事しろ！」

いつも、いつも失敗に終わる仕事――多分、自分は落ちこぼれなのだ。奇尖の話では、自分と同じ色の目をした人達は、ちゃんとどんな願い事だって叶えてあげたそうなのに、自分はどうしてもそれができないのだから。全く力がないわけではないのだ。例えば、おばあさんのなくなった指輪が見つかるように願った時とか、同い年くらいの少女が、年の離れた弟の病気のことで相談に来た時とか、けっこう願い事は叶えてあげられたのだ。

ただ、うまくいかないのは、奇尖が『大口の客だ』と言った時に限っていて、だから彩眸が金にもならないことで力を発揮したりすると、凄い剣幕で怒ってしまうのだ。

多分、自分が悪いのだ、と思う。だって、小さい頃、拾ってくれた奇尖に恩返しするには、この力を使うしかないのに、奇尖の期待する時に限って、自分は失敗するのだから。どうしてなのか、わからない。ただ、その願い事というのに、どうしても心

を溶けこませることができないのだ。

「どうしたら、いいんだろう……」

ぽつり、とつぶやいた彩眸は、涙が頬をつたっていることに気付いてびっくりした。

何が悲しいというわけでもないのに、涙が出て来る。自分がなさけなくて——奇尖の思うように、力を発揮できない自分が、とても悲しくて。

「どうしたら、いいんだろ」

もう一度つぶやいた彩眸の耳に、おかしそうな笑い声が聞こえてきたのはその時のこと。

「そのままでいいんだよ」

姿も見せぬ声の主(ぬし)——もしかして、闇使(あんし)？

体をぶるっ、と震わせて、彩眸は自分の肩を抱いた。

2

世界最大の都市リィジャスに次ぐ大都市シラスの下町に建てられたみすぼらしい天幕が、奇尖が彩眸のために開いてくれた店だった。

そこで彩眸は午後から店を開き、明け方まで客の願いを聞いては叶えるように努めるのだ。夕方までは、彩眸の叶えられる程度の願いを持つ客が来て、彩眸としては昼間に店を開きたいのだが、奇尖が絶対にそれはだめだと言うので、眠いのを我慢して朝まで店の机の前に座っているのだ。

そろそろ日が暮れる、という頃、奇尖がにこにこと彩眸のそばに来て言った。

「今夜は大口の客が来るからな。今度こそしっかりするんだぞ？　これに失敗したら、俺達はこの街にいられなくなるんだからな。そのかわり、うまくいったら、こん

なボロな店とはおさらばだ。いいもの食って、楽な生活ができるんだからな。頑張るんだぞ」

息が酒臭かった。

「いいか？　今度失敗したら、その役立たずの目をくりぬいて、奴隷市場に売り飛ばしてやるからな。うまくやれよ！」

冗談とはとても思えない奇尖の言葉に、彩眸は泣きそうになった。

「いいな？」

とろん、とした赤い目に、瞬間殺意が閃いたのに気付いて、彼女はこくん、とうなずいた。ここまで、奇尖を怒らせたのは自分なのだ。今度こそ、彼の期待に応えなければ、きっと彼は本当に自分の目をくりぬいてしまう。

「わかればいいんだ」

上機嫌にそう言い置いて、天幕を出ていく奇尖の背中を見ながら、彩眸は唇を噛みしめた。

うなずきはしたけれど、全然自信なんてなかった。ああ、どうか、今度こそ失敗し

ませんように……必死に願ったけれど、それが叶うかどうか、彩眸にはわからなかった――。

※

「あの人を殺して下さい」

店を訪れた、黒いヴェールの貴婦人は、静かな声でそう言った。

「あの人が死ねば、私がこの街の支配者です。その暁には、あなた達を重く用いることを約束しましょう……お願いです。あの人を殺してください」

シラスの元首の奥方の願いを聞いた瞬間、彩眸は心臓が凍りつくかと思った。拳が机の上で、小刻みに震える。どうしよう……どうしよう！

黙りこんだ彩眸の反応を、了承と受け取ったのか、その夫人は優雅に天幕を出ていった。そもそも、奇尖がすでに受けているに違いない仕事なのだ。彩眸が否、と言えるはずもない。

けれど――。

「奇尖……奇尖！」

嗚咽まじりの声で、彩眸は養父の名を呼んだ。

「奇尖……来て……」

肩が、腕が、全身が、ぶるぶると震えて仕方なかった。怖くて――心底恐ろしくて。

「どうした、彩眸。なかなか凄い願い事だったろう？」

ぷんぷん酒の臭いをさせて、奇尖が天幕に入ってくる。

がたん、と音をたてて立ち上がって、彩眸は奇尖に抱きついた。

「奇尖……これが、仕事なの？　失敗したらこの街にいられない仕事って、さっきの人の願いなの？」

違うと言って欲しかった。もっと遅くになってから、本命の客は来るのだ、と奇尖に言ってほしかった。だが、奇尖はゆっくりうなずいたのだ。

「そうだ。この仕事さえ成功させれば、俺達は大金持ちだぜ」

と言って――。

3

「駄目……無理よ、奇尖。断って。あたし、人の死を願うなんて、できっこないよ」
「何を言うんだ、彩眸。お前の中には、水晶の一族の血が流れているんだ。そのバラ色の瞳が何よりの証拠。水晶の一族と言えば、叶わぬ願いはない、という伝説の呪術師一族じゃねえか。大丈夫、この仕事さえすめば、おれ達はこの街の元首様の恩人だ。贅沢放題の生活ができるんだぞ？　な、育ててやった俺のことを、少しでも感謝してくれるんなら、この仕事を成功させてくれ」
　成功の暁の報酬を、すでに手に入れた気分でいるらしい奇尖に、彩眸は取り縋って頼みこんだ。
「無理だってば。あたしは、人の怪我さえも自由にできない落ちこぼれなんだから

……奇尖だって知ってるじゃない。誰かを病気にしてくれ、とか怪我させてくれっていう願いを、あたしが成功させたことなんてないこと……お願い、奇尖。断って……あたしできない、したくないんじゃなくて、できない。見たこともない人の死を願うなんて……」

ぽろぽろ、ぽろぽろ。

大きな瞳に涙をいっぱいにためて懇願する彩眸に、奇尖が与えたものは、容赦のない拳だった。

「甘えるな！　親を亡くして泣いてたお前を誰が育ててやったと思ってるんだ。恩返しのひとつもする殊勝さもないってのか、この恩知らずが！」

床に尻餅をついたまま、彩眸はがたがたと震えた。

ああ、また怒らせてしまった。どうしてだろう、いつもいつも、自分ができないことを言うたびに、奇尖は怒ってしまう。左目が痛くて、目の前の奇尖も怖くて、彩眸はそれ以上何も言えなくなった。

「この仕事が終わったら、贅沢もわがままもいくらだって聞いてやるって言ってるだ

ろうが、彩眸。頼むから、もう少しだけ辛抱してくれよ、な？」

「でも……」

できないのに……どう頑張っても、自分にはできないのに――。

そう思うのに、言葉に出せない自分が悲しかった。奇尖に捨てられてしまうかもしれないのがいやで、ずっと頑張ろうとしてきたけど、やっぱり無理で……でも、これはわがままなんだろうか？　それとも、奇尖が期待してくれているほど、自分には能力がないのだろうか？

そうかもしれない、と彩眸は思った。一つはっきりしていることは、奇尖が何と言っても、人の死を願って、現実にするなんてできやしない、ということ。

「やっぱり、無理よぉ、奇尖。ねえ、街を出ようよ……」

顔をくしゃくしゃにして頼みこむ彼女を、奇尖は硬い革の靴で蹴りつけた。

「馬鹿野郎！　街を出てそれですむなんて、本気で考えてるんじゃないだろうな……いいか？　あの女はこの街の元首の奥方なんだよ、実力者なんだ！　その女の秘密を知っている俺達を、あの女が黙って街から出してくれるとでも思うのか！　お前が依

頼通り、元首を呪い殺すしか、俺達が生き残る道はないんだ！」

血走った奇尖の目を見た彩眸は、背筋に冷水を浴びせかけられたような錯覚を覚えた。その言葉の内容に、ではなく、鬼のような形相の奇尖の瞳に、理解できない、どろどろした汚濁を見出したせいだった。

怖い……奇尖が怖い。こんなに瞳の奥に汚濁を持つ存在を、彩眸は他に知らなかった。

「つべこべ抜かさずにやるんだよ」

知らず後ずさる彩眸に、奇尖が腕をのばした刹那、漆黒の翼が、彼女をふわりと包みこんだのだ……。

4

羽音ひとつしなかった。だが、まぎれもない黒々とした翼が、彩眸を守るように包みこんでいた。顔を上げて、彼女は息を呑む。

黒衣を身に纏い、その背に鴉の翼を持つ、類稀な美貌――夜の闇より濃い闇を、全身に纏わせる存在が、そこにいた。

「ひぇ！」

婉然とした微笑みをたたえるその存在を見た瞬間、奇尖がその場に腰を抜かす。

「闇使……死の、使いがなぜ……」

そう、それは闇使。二十回目の『紅の蓮』の年以来、世界に出現した人ならざる存在に他ならなかった。

死期の近い人間の元へ訪れ、その魂をいずこかへ運び去る死の使い……それが今、彩眸を抱きしめ、奇尖から守っているのだ。

「馬鹿ですねえ」

うっすらと笑って、闇使が奇尖の問いに答える。嘲りを、微塵も隠す気配も見せず。

「わたしが何のために現れるかは、五歳の子供にでもわかりそうなものですのに。わたしはこの少女を迎えにきたのですよ。あなたのお迎えは、別の仲間が来ることになっております。もう少しお待ちなさいな」

死の宣告、であった。

「馬鹿な……おれが何を……」

「呪術が禁じられていることは誰もが知っておりましょう。あなたはこの少女を使って、禁を犯した……依頼者達は果たされぬ依頼に不安に駆られたのですよ。いつそれを元にゆすられるかもしれぬ相手を野放しにしておくよりかは、いっそ、と。簡単な図式ではありませんか。刺客はすでに放たれ、すぐにこの天幕を囲むでしょう。この

娘にそんな悲惨な死に方はさせたくないのです。あなたはどうだっていいのですがね」

いったん言葉を切って、闇使はにやりと笑った。

「そういうわけで、この娘は連れていきます。あなたは勝手になさい。どうせ世界中にわたし達は散らばっておりますから、どこへ逃げても同じことですがね」

淡々とした口調で闇使が告げる間にも、奇尖はすでに手足をじたばたさせて、逃げようとしていた。闇使は嘲笑も露に彼を見つめ、言った。

「刺客に襲われ、非業の死を遂げるのがいやであったら、いつでもリィジャスへおいでなさい。われらが都へ……気が向いたら、わたし自ら、引導を渡してもいいですよ」

「だ……だ、誰が！」

目を白黒させて、奇尖が叫ぶ。そうして、彼は闇使に抱かれた彩眸には目もくれず、天幕を後に、走り出したのである。

「奇尖！　待って、奇尖！」

必死になって、彩眸は養父の名を呼んだ。だが、薄情な男は、闇使に見込まれた娘のことなどおかまいなしに、驚くべき逃げ足の速さを披露し、そのまま彼女の視界から消え去ったのである。

「奇尖！」

「およし」

自分を置き去りにして逃げた養父の名を呼ぶ彩眸に、闇使は信じられないほど優しい声で告げたのだ。

「あれは、君を利用し続けた男。君の希有な力に目をつけ、死ぬまでこき使おうともくろんでいた男だよ？　あんな男のことを呼ぶのはおやめ。その目の周りの痣は誰がつけた？　その背中の傷は？　バラ色の水晶のような美しい瞳に、怯えの影を落としたのは一体誰だ？　君はもっと、幸せにならなければならない」

死の使いとは、とても思えない、人間味に満ちた声だった。まるで父さんが帰ってきたみたい……そっと振り返って、闇使の顔を見ようとした彩眸は、一瞬驚愕に言葉を失った。なぜなら、そこで自分を抱きしめてくれているのは、先ほどまでの、綺麗

だがどこか恐ろしい闇使ではなくて、とても、とても美しい青年だったのだから。

「あなた……？」

茫然と尋ねた少女に、青年はにっこり笑ってこう言った。

「ああ、綺麗なバラ色の瞳だ。呪術によって闇に染まってしまったのではないかと懸念していたのだけれど……あの男は君の心までは、闇に落とさずにすんだのだね」

心底ほっとしたような顔の青年は、彩眸を懐かしそうに見つめた。

「闇使の幻なんか見せて、驚かせて悪かったね。だけど、ああでもしないと、あの男は決して君のことを諦めはしないだろうと思って……わたしは朱麻。君を、迎えに来たんだ」

「あたしを、迎えに？」

大きな目をさらに大きくして問う彩眸に、朱麻はゆっくりとうなずいたのである――。

5

朱麻（シュマ）は彩眸（サイム）の母親に拾われたのだ、と言った。地震ではぐれた夫と娘を探していた彼女の母親は、その天災で親を亡くした朱麻を見つけ、育ててくれたのだ、と。

「ずっと、旅をしてたんだ」

ぼろぼろになった天幕で、朱麻はとても懐かしそうな瞳で彩眸の母のことを語った。

「すごく、優しい人だった。君ほど純粋なバラ色の瞳ではなかったけれど、君のことを話す時のあの人は、まるで女神みたいに輝いて見えたんだ。すごく綺麗（きれい）な瞳をした娘がいるの。あの子は何代か前に途絶（とだ）えた、純粋な水晶の一族の瞳を持っているって。あの子だけはその力を闇に落とさせたくないって、いつも言ってた」

「お母さん……あたしの？」

彩眸は今一つぴんとこないまま尋ねた。だって、いつもそばにいたのは父だった。その後は奇尖。そんな風に、自分のことを、自分の知らない人が言っていたなんて、なんだか不思議だった。

「そう……。彼女は、君が欲の深い人間に利用されるのを、何より恐れていたんだ。水晶の一族の人間は、確かに願うことで、それを現実にする能力を持っているけれど、それを人を傷つける方向に向けた場合、心が闇に侵され、絶望のうちに死んでいくことになるからって……人を傷つけたら、その傷は自分にも跳ね返ってくるものだから。そうやって、過去に一族の人間が、絶望の淵に沈んだことを知っているから、絶対に娘にはそんなことはさせたくないって言ってたんだ」

「傷つけるって、知らない人の病気を願ったり、死んでほしいって思うこと、だよね？」

「うん、そうだ。実際、願えば君にはできたことなんだよ」

「でも、できなかったわ、あたし。どうしても、願いまで高めることができなかった

の。だからいつも奇尖に怒られて……でも、あれは間違ってはいなかったの？　あたし、自分のことを落ちこぼれだと思っていたけど、違ったの？」

奇尖の言うことは絶対なのだ、というこれまでの法律に綻びができはじめていた。彩眸の言葉に、朱麻はうん、とうなずいた。

そうして、彩眸のことをまた抱きしめる。

抱きしめられる、ということが、こんなにも……心まで温かくなれることだなんて、彩眸にとっては初めての発見だった。

「彩眸……君はすごいね。君は無意識のうちに願いと邪な欲望の違いをしっかりと摑んでいたんだ。人間の邪欲から発せられたことは拒絶して、純粋な願いにのみ心を開いてたんだ。だからこそ、君の心は、こんなにも白い……」

服を通して、朱麻の温かさが、やわらかな波動が染みこんでくる……。

「でも、あたし、シラスではもうお尋ね人だわ」

「大丈夫。リィジャスへ来てくれれば、心配はいらない。君は幸福を摑むために、生まれ変わらなくてはいけないんだから。それがあの人の願いであり、わたしの願いで

もあるんだ……今、一番したいことを言ってごらん。わたしはなんだって叶えてあげる。何だってしてあげるよ。伊達に魔術師の資格を持ってるわけではないんだからね」

彩眸の瞳を覗きこんで、朱麻はにっこりと微笑んだ。なんだろう……すごく、安心できる。そう思った時、彩眸は初めて、おずおずと彼に対して笑いかけたのだ。

「じゃあ、教えて、母さんのこと。それからあなたのことを」

「長い、長い話になるよ？」

「うん」

うなずいて、彩眸はことん、と朱麻の肩に頭をあずけた。やっとみつけた、心底安心していられる場所。もう、きっと瞳の色は薄れない……心から打ち解けていられる人を見つけたから。

こうして一緒にいてくれる人をどんなにか自分が求めていたのか、彩眸は初めて知った。知って、幸せな気分になった。父さんと一緒にいるみたいに安心できる。でも、父親のそばにいる時は感じなかった動悸の理由を、彼女が知るのは少し先のこと

である。

あとがき

ていたらく……ああ、ていたらく、低鱈苦（わかる方だけお笑い下さい）。
我が身の不甲斐なさがただ情けなく、恥じ入るばかりであります。
明るく陽気な読み切りを書きたいと思ったわけです。
主人公は出生の秘密もなにもない女の子。
権力とも無縁なら、世界の命運ともやっぱり無縁。
なのにひょんなことで事件に巻きこまれ……あれよあれよという間にとんでもないことに——を目指したというのに……あぁぁ、低鱈苦（くどい）。
よもやまさか、一冊読み切りのはずが、続き物になってしまうとは……。
本当に申し訳ありません。読者さまにはいくらお詫びしても足りません。

でも、でも、必ず次の巻では終わらせます！
ええ、絶対に！
懺悔をしているとどこまでも終わりがなさそうなので、ひとまず話題を切りかえるとして。
自身の低鱈苦（言っておきますが誤字の当て字です）の結果、今回収録されることになった作品は以前雑誌に掲載されたものです。
あまりにも昔すぎてためらわないでもありませんでしたが、読みたいという声もちらほらいただきましたので、甘えさせていただきました。
『終末都市の灰色天使』と『幸福の刻印』は、世界設定として同じものです。書いた順番は『終末都市』が先ですが、時代的には『幸福』のほうが前となります。本当はさらに以前の話をもうひとつ考えていたのですが、機会のないまま現在に至っております。すでに大まかなところしか覚えていないので、永遠に幻のまま終わることでしょう。
そして『木蓮抄』――これは実に思い出深い作品です。

ずばり枚数！　雑誌に掲載される作品は、前もって枚数が決められております。このときの枚数は十枚でした。聞いて真っ青になりました……だってわたしはそれまで、そんな枚数の小説を書いたことがなかったんです。

ああでもない、こうでもないと四苦八苦したことを覚えてます。

三作品とも、あまりにも時間が経過してますので、改稿はせず、あえてそのまま収録することにしました。改稿しようにも、本当にどこをどういじっていいのやら、もはや作者にもわからないという状況なものですから。

最近、シークァーサーのサイダー割りをよく飲んでます。以前は九州沖縄の物産展とかでないと見つからず不自由してましたが、テレビで血液サラサラ効果が取り上げられて以来、近所でも手に入るようになってラッキーです。ただ、これから寒くなるので、飲み方は工夫せねばと思ってます。どなたかお勧めがありましたら教えてください。

次の作品がなににになるのかはまだ不明ですが、あまりお待たせしないよう頑張ります。

それでは、またお会いできることを願って――。

平成十五年　師走

前田珠子

〈初出誌一覧〉

「天を支える者」……書き下ろし
「終末都市の灰色天使」……Ｃｏｂａｌｔ'89年夏号
「木蓮抄」……Ｃｏｂａｌｔ'89年12月号
「幸福の刻印」……Ｃｏｂａｌｔ'90年4月号

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者

COBALT-SERIES

2004年1月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子

発行者　谷山尚義

発行所　株式会社 集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2004　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600363-5 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1～3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣
魔性降臨
白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣
紅の魔剣 碧の魔胎
最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣
深紫絃韻 1 2
魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

聖石の使徒

其は力を放つ者

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

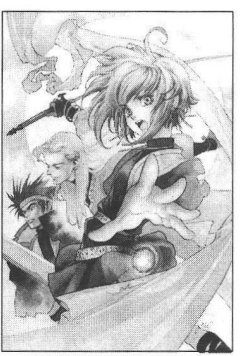


〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しますー。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



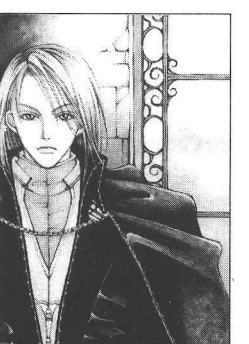
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



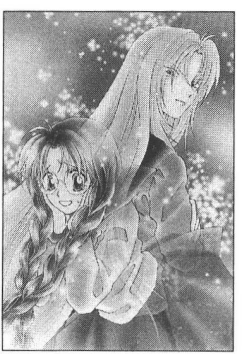
狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1〜3

前田珠子
イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086003636

ISBN4-08-600363-5

C0193 ¥419E

1920193004199

定価本体419円＋税



コバルト文庫